

平泉文化研究年報

第 5 号



平成17年 3 月

岩手県教育委員会

序

岩手県では、平泉の文化遺産を総合的に調査研究し、その成果を広く公開・活用していくため、平泉文化の研究機関を整備していくことを検討しています。

現在、この研究機関の整備を進めるために、平泉遺跡群の中核遺跡である国指定史跡「柳之御所遺跡」をはじめとした発掘調査を進めております。さらに、平泉文化研究に必要な人材の発掘と育成、研究者相互の連携や多角的・学際的な研究の推進を図るため、平泉文化に関する共同研究を実施することにより、研究基盤の整備と拡充に取り組んでいます。

この度開催しました「第5回平泉文化フォーラム」は、この取り組みの一環であり、平泉文化に関わる最新の研究成果について広く情報を発信することで、多くの方々が平泉文化研究に接していただくことを目的としています。

今回刊行します「平泉文化研究年報」は、今年度共同研究に御協力いただき、このフォーラムで発表された4名の先生方の研究成果をまとめたものです。当事業も5年目となり、考古学分野だけでなく、建築学や自然地理学などさまざまな分野の先生方に参加していただき、平泉文化研究への多面的なアプローチがなされるようになってきました。今後、本誌がいかばかりか文化財保護や平泉文化研究発展の一助となれば幸いです。

また、平成13年4月、「平泉の文化遺産」が国連教育科学文化機関(ユネスコ)の世界文化遺産の暫定リストに登録されました。本誌及び当フォーラムが、平成20年の世界遺産本登録に向けた平泉文化に関する県民の学習の場としての役割も果たし、より充実した内容となるよう努めて参りたいと考えています。

最後に、共同研究に参画の諸先生、御多忙の中、基調講演を御快諾いただいた入間田教授、御協力いただきました江刺市、歴史公園えさし藤原の郷をはじめとする関係各位の皆様に深く感謝申し上げます。

平成17年3月

岩手県教育委員会

教育長 佐藤 勝

目 次

序

平安時代後期京都の伽藍と毛越寺・嘉祥寺	富 島 義 幸…………… 1
安倍氏の柵の構造(2) 一居館としての柵一	羽 柴 直人…………… 15
中世都市周縁部の歴史を探る 一毛越地区の踏査から一 その2	岡 陽一郎…………… 29
柳之御所付近の沖積地の河川氾濫と河道痕跡の検出 一地形学の手法を用いて一	野 中 奈津子…………… 37
柳之御所遺跡中心域における遺構の変遷(中間報告) 一史跡整備計画との関わりを中心に一	…………… 45

1 本書は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が実施している「平泉文化研究機関整備推進事業」の一環として刊行するものである。

2 本書には、平泉文化研究に関する共同研究者の研究成果の内容を掲載している。
共同研究者は公募により選考しており、平成15年度から平成17年度まで研究を継続する中堅研究者3名と、年度毎に公募する若手研究者(主に学生を対象とする)1名からなる。

平成16年度共同研究者

富 島 義 幸【滋賀県立大学環境科学部助教授】

羽 柴 直 人【(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター文化財調査員】

岡 陽一郎【青山学院大学非常勤講師】

野 中 奈津子【東北大学大学院生】

3 本書の編集は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の佐藤嘉広、佐藤淳一、大関真人が行った。

平安時代後期京都の伽藍と毛越寺・嘉祥寺

富島義幸

はじめに

平泉の寺院建築の大きな特徴は、発掘調査により遺構が確認された毛越寺・嘉祥寺・無量光院をはじめ、『中尊寺供養願文』から知られる伽藍（以下、「清衡願文伽藍」とする）など、コ字型廻廊の形態をとり、苑池をそなえる伽藍が複数存在していたことである。こうした伽藍は、京都の平等院鳳凰堂や法勝寺金堂と共通し、それらは一括して「浄土教伽藍」と位置づけられてきた。

ところが、法勝寺をはじめとする六勝寺については、「浄土教伽藍」とされる一方で、その形態から四天王寺や東大寺をはじめとする古代伽藍になぞらえられ、復古的性格が指摘されている¹。また別稿で示したとおり、法勝寺伽藍は法成寺の直接の影響を受けており²、その法成寺も中尊である大日如来は東大寺毘盧遮那仏を規範とする³など、南都の伽藍から少なからず影響をうけている。毛越寺など平泉の伽藍を、平安時代後期の寺院建築の系譜に位置づけていくためには、伽藍・建築形態はもちろん、信仰の在り方からも、いわゆる「浄土教建築」の系譜を再検討しなければならない。

本稿では、平安時代後期の伽藍を体系的にとらえるための基礎的考察として、京都・平泉の個別伽藍を建築形式・伽藍構成理念という2つの視点から検討し、いくつかの問題点を指摘するとともに新たな視点を提示していくことにしたい。

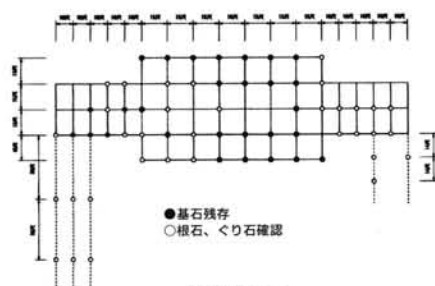
1. 毛越寺金堂と嘉祥寺本堂

1.1 全体構成

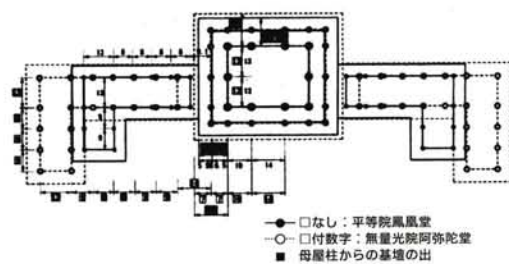
毛越寺金堂・嘉祥寺本堂ともに、中堂部分は三間四面裳階付という形式をとる。平面規模をみても、中央柱間が毛越寺で16.08尺であるのに対し、嘉祥寺で18.2尺と大きいものの、他の部分はほぼ一致しており、両者がきわめて近い関係にあることが知られる。廻廊についても柱間寸法はほぼ完全に一致し、軒廊（東西方向部分）の長さまでが一致している。平面計画からみて、嘉祥寺は毛越寺を直接の規範にしていたといえる。以下に、これら2つの建築の構成を、具体的な平面形態・寸法が判明する天喜元年（1053）の平等院鳳凰堂、承暦元年（1077）の法勝寺金堂、久寿元年（1154）の金剛心院釈迦堂、建久5年（1194）に完成したとみられる鎌倉永福寺などと比較しながらみていくことにしよう（【図①】を参照）。

なお、清衡願文伽藍では、中堂である三間四面堂は檜皮葺、廻廊・鐘楼については屋根の記載はなく、経蔵は瓦葺とされる。この建築では経蔵・鐘楼は独立して立ち、毛越寺のように廻廊の先端にとりつく形式ではなかったと考えられる。また、花館廃寺については、従来は毛越寺や無量光院と同じくコ字型廻廊の形式が想定されてきたが、廻廊とされる遺構の寸法から、これらと同様のコ字型廻廊ではなかったと想定されることは別稿で示したとおりである⁴。

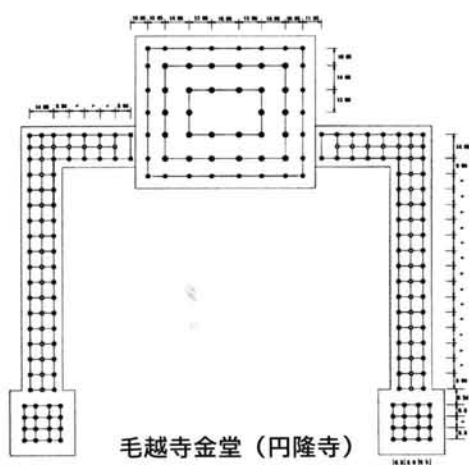
さて、中堂が裳階をそなえる点や廻廊・鐘楼・経蔵の構成など、毛越寺金堂の形態が法勝寺金堂と共通していることはすでに指摘されているとおりである。毛越寺金堂では、法勝寺では金堂背後に位置する講堂を横に移動してまで、金堂前面の長大な廻廊をもうけ、奥行のある前庭空間をつくった点も特徴的といえよう。その奥行は法勝寺金堂とほぼ同じであったと想定され、おそらくは舞台をもうけるなど金堂での法会での前



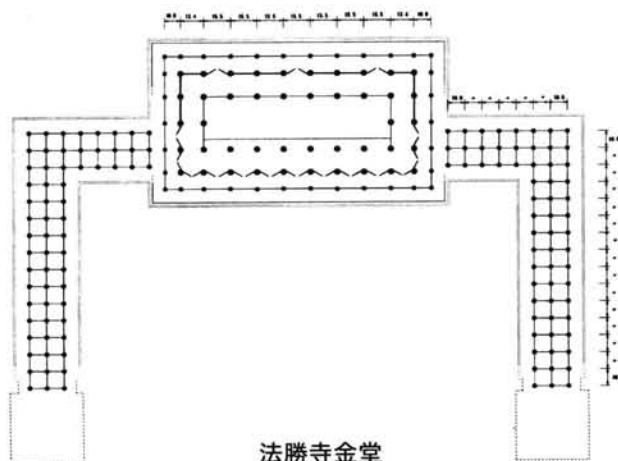
花館廃寺



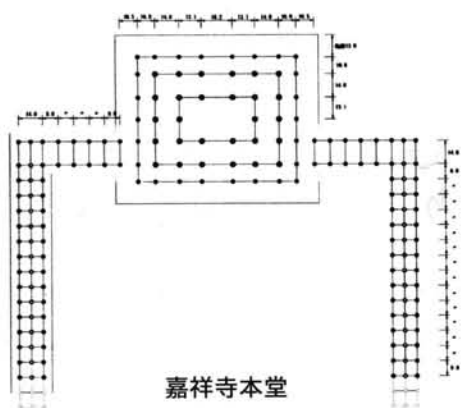
平等院鳳凰堂・無量光院阿弥陀堂



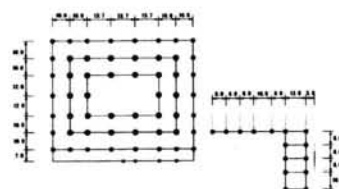
毛越寺金堂 (円隆寺)



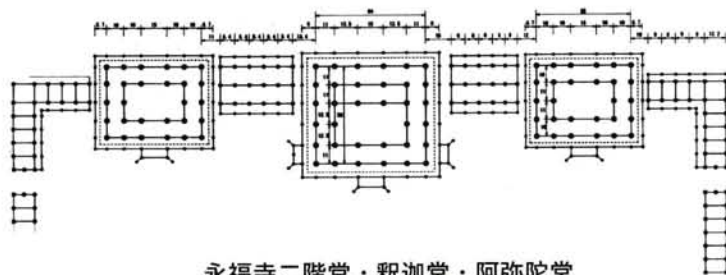
法勝寺金堂



嘉祥寺本堂



金剛心院釈迦堂



永福寺二階堂・釈迦堂・阿弥陀堂

【図①】平安時代後期の金堂・本堂の平面比較

庭空間の必要性から確保されたものであろう。池が近くまでせまり、前面にじゅうぶんな空間がえられない法勝寺阿弥陀堂の場合、その供養会では正面の池には南北幅15丈もの仮板が敷かれている（『経俊卿記』建長5年（1253）12月22日）。

中堂の規模は毛越寺金堂・嘉祥寺本堂ともに法勝寺金堂にくらべれば小さく、それは法勝寺金堂を縮小したものともいえようが、むしろ仁平3年（1153）供養、鳥羽金剛心院の三間四面の釈迦堂に近い。この仏堂には、丈六の釈迦と八尺の普賢・文殊からなる三尊が安置されていた⁵。発掘遺構⁶から知られるその規模は毛越寺にくらべるとやや小さいが、三間四面に裳階がまわる。発掘遺構では南面する釈迦堂の西側に九体阿弥陀堂がとりつき、釈迦堂が中心となる伽藍であったことが知られる。東側のみではあるが、L字型廻廊がとりつく点も注目されよう。この廻廊の南先端の東横には船着場がもうけられ、苑池と一体になった建築造形が読み取れる。

鷹司本『年中行事絵巻』推定法勝寺金堂では、基壇上、裳階の床は框の分だけあげた、平等院鳳凰堂と同じ程度の低いもので、廻廊はやはり平等院鳳凰堂と同じ土間でとして描かれる。法勝寺金堂や平等院鳳凰堂など、11世紀の裳階・廻廊付の仏堂はこうした形式であったことが考えられ、これらを規範とした毛越寺金堂も同様であったと推定される。ところが、嘉祥寺本堂には基壇ではなく亀腹がもうけられ、さらに床束をうける礎石があることから、堂内が板敷であったことが確かである。また、西廻廊においてその東面と西面の根石に、大きなところでは2尺もの高さの差があったことが報告され、この高低差を解消するためには床をもちいる必要があるため、廻廊も板敷と考えられている。

また、嘉祥寺では廻廊の先端に鐘楼や経蔵は取り付かず、東の廻廊は苑池に向かってさらにのびていた可能性が高い。嘉祥寺本堂は、平面・寸法計画は毛越寺金堂を規範とするものの、建築形式には相異があったとみなければならず、そこから想定される建築の姿は、法勝寺金堂よりも、むしろ堂や廻廊に縁をもうけ、廻廊が苑池まで伸び、釣殿を設けることで庭園と一体化した鎌倉永福寺に近い。金剛心院など鳥羽の伽藍が、住宅建築と近い建築形態をとっていたことはしばしば指摘されているが、永福寺の左右対称の形態は、嘉祥寺本堂などの影響を色濃く残している。つまり、毛越寺金堂から嘉祥寺本堂・永福寺という流れは、平安時代後期における金堂を中心とする伽藍の変容を示しているといえよう。

永福寺は、発願において平泉大長寿院の「二階大堂」を規範に「二階堂」を建立する⁷とあることをもって、大長寿院を規範としたととらえられている。しかし、その扉や仏後壁の絵は「秀衡」建立の「円隆寺」を規範としており⁸、この「円隆寺」とされる建築は、秀衡建立とされることから嘉祥寺本堂を指す可能性も考えられる。嘉祥寺本堂は、『吾妻鏡』文治5年（1189）9月17日の条所収の注文にも、とくに内部の壁・扉に法華経廿八品の大意を図絵したことが記される。発掘遺構から想定される永福寺の建築形式は嘉祥寺に近く、これをもとにしたと考えるべきであろう。

なお、発掘調査の報告によれば、嘉祥寺の亀腹は裳階の柱筋から13尺、庇の柱筋からは23尺も出ており、この外まで裳階あるいは身舎の軒が出ていたとは、現存遺構の軒の出からみて考え難い。ふつうは亀腹の外に床束が立ち、縁を設け、その上を軒がおおうことになるが、嘉祥寺本堂では軒は亀腹途中でまでしか出ておらず、雨水が亀腹上に落ちていたことが想定されよう。また、廻廊の根石の高さの差は、板敷をもって解消していたとすれば水平な床面がえられるものの、建設の精度としては毛越寺にくらべて落ちるといわざるをえない。きわめて近い規模・構成をとる伽藍の施工の差については、六勝寺が並び立つ京都の白河にならって毛越寺周辺の景観をつくりだすべく、大伽藍の建設を急いだため、あるいは新たな伽藍形式を模索していたためなど、いくつもの解釈がありうるが、現段階では明確にし得ない。

1.2 廻廊の形式

廻廊で注目すべきは、毛越寺・嘉祥寺いずれも同じ平面寸法をとり、しかも単廊となる部分と複廊となる部分が混在している点である。毛越寺では中堂の取り付け部分のみが単廊となり、他はすべて複廊である。嘉祥寺は東西方向の軒廊部分のみが単廊で、南に折れた南北方向部分は、複廊となっている。しかも、いずれも両側の柱は礎石であるのにたいし、中央の柱は掘立柱となっている点も特徴的である。

嘉祥寺本堂の軒廊は、中堂の左右裳階の正面から第2間の柱間に柱筋があわされているが、平等院鳳凰堂や無量光院阿弥陀堂と同じ取り付け方をしており、さらには梁行の柱間寸法もほぼ一致し、これは鳳凰堂と同じ単廊とみなしてよい。毛越寺の軒廊も、両端の柱筋は同じ取り付け方をしている。複廊の場合は、法勝寺金堂のように複廊の中央の柱筋が身舎の柱の位置にくるはずで、毛越寺金堂の中堂の取り付け部分のみ中央の柱がないのは、廻廊から中堂に上がるための石段がもうけられているためである。つまり毛越寺の廻廊は、一見複廊のようにみえるが、じつは単廊とみなされるのである⁹。

では、毛越寺・嘉祥寺廻廊の中央の掘立柱は、どのように理解すればよいのであろうか。平等院鳳凰堂を規範として建設された勝光明院阿弥陀堂では、廻廊の構造が問題となっている。『長秋記』保延元年(1135)6月1日の条には、

一、廻廊於南北不可敷板敷敷、大工季貞申云、板敷不被敷下不可持、二階廊上重下弱敷、法勝寺柱三也、宇治柱二仍付木也、

とあり、二階廊の構造的な弱さが指摘され、その対策として板敷が有効とされている。たしかに、平等院鳳凰堂の廻廊は、現在のものは下層の柱の上部・下部2本の貫が入れられているために構造的にも安定しているが、当初、これがなかったとすれば、わずかに柱頂上部の頭貫があるものの、この廻廊はほとんど柱の自立性によってのみ立っていたことになり、きわめて不安定である。廻廊に板を敷くことは、こうした自立しなければならない下層の柱を、少しでも固定しようとするものでもあったことが知られよう。法勝寺では「柱三也」すなわち複廊であることにくわえ、中央の柱筋に連子や壁を入れられ、これによって廻廊を安定させていたと考えられる。それに対して「宇治柱二仍付木也」とあるのは、同じ二階廊でも柱2列で不安定な平等院鳳凰堂の廻廊では、貫ではないにしても、補強のための何らかの「木」が「付」けられていたことが考えられる。

平泉の毛越寺金堂・嘉祥寺の廻廊では、平等院鳳凰堂とほとんど同じ規模の廻廊をもちいながら、長くより不安定な廻廊を、その中央に掘立柱を加えることで構造補強していたと理解されよう。観自在王院南面の棟門など、構造的に不安定な部分には自立性の高い掘立柱がもちいられている。つまり、毛越寺金堂の廻廊は単廊であり、しかも単層の廻廊ならば中央の掘立柱は必要なかったはずで、平等院鳳凰堂を規範とした二階の廻廊であったと考えられる¹⁰。

2. 平安時代後期伽藍の系譜

2.1 裳階をもつ仏堂

裳階付の仏堂は、薬師寺金堂・講堂をはじめ興福寺金堂など、奈良時代からみられる。法成寺金堂も裳階をもうけるが、三重塔は薬師寺の特異な形式の塔を模倣しており¹¹、金堂も薬師寺金堂を規範としていた可能性が考えられる。後に詳しく述べるが、法成寺金堂の中尊は、その蓮華座には東大寺大仏殿の毘盧遮那仏にみられる蓮華座の千釈迦をそなえており、南都の伽藍が影響を与えていたことはじゅうぶんに考えられるのである。また、広隆寺金堂や醍醐寺金堂・仁和寺金堂・高野山金堂・比叡山根本中堂など平安時代の権門

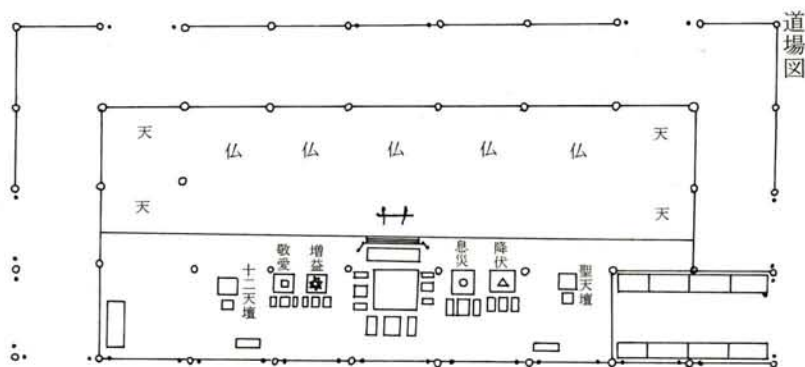
寺院の金堂は、古代伽藍と同様に廻廊をそなえながら、前面に礼堂を付加する形式をとるようになるのに対し¹²、礼堂ではなく裳階をもうける法成寺や六勝寺の金堂は、古代伽藍の金堂を直接継承しているといえる。

平安時代後期の御願寺においては、金堂のみならず阿弥陀堂や五大堂、さらには塔にまで裳階の存在が確認でき、その空間は仏事における天皇家の御所という、特別な意味をもつようになる。例えば、承暦元年(1077)の法勝寺供養会における金堂の空間構成をみると、裳階には白河天皇・陽明門院の御所がもうけられている。こうした空間構成は、公家と仏教からなる社会構造を反映するものであり、後世も足利義満の相国寺七重塔供養会へと継承されていく¹³。御願寺の建築において裳階は、天皇家を象徴するきわめて重要な空間になっていたのである。

こうした象徴的意味をもつ裳階空間の在り方は、延久2年(1070)、後三条天皇の円宗寺金堂の供養会にすでにみることができる。この供養会について記した「円明寺供養式(後改円宗寺)」¹⁴には、中堂の鋪設について、

前一日堂莊嚴、南裳層東三間懸御簾、所司設御座於東第三間、同二間立大牀子、為御休息諸、西三間為陽明門院御在所、東第三間東南柱下設皇太子御座、南榮東第二間以東、設王卿座、東裳層懸簾、敷内侍女蔵人等座、南階西壇下西退、敷侍臣座、同東壇下東退、敷上官座、東廊壇下南退、敷式部彈正等座、とあり、裳階の左右3間に御簾が懸けられ、天皇の御所をはじめ皇太子(後の白河天皇)、陽明門院の御所がもうけられるという、後の院政期御願寺供養会の規範となる空間構成があらわれていた。

鷹司本『年中行事絵巻』推定法勝寺金堂では、裳階には建具が入らず、吹き放ちとして描かれる。平等院鳳凰堂や法界寺阿弥陀堂のように、平安時代後期の御願寺建築の裳階は、開放的な空間であったと考えられる。『門葉記』巻第二「熾盛光法二」にのせる法勝寺金堂指図(【図②】)には、裳階をのぞいた身舎が描かれるが、庇の柱間装置として壁・扉が示され、その外をとりまく裳階は吹き放ちであったとみてよい。また、正面九間の柱間すべてが扉となり、きわめて開放的な空間であった。



【図②】『門葉記』巻第二「熾盛光法二」所収法勝寺金堂指図
(『大正新脩大經藏 図像第11巻』所収図版をもとに作成)

なお、福山敏男氏は鷹司本『年中行事絵巻』推定法勝寺金堂の場面を法勝寺大乘会とみなすが¹⁵、大乘会とはほんらい講堂でおこなわれるもので、この建築が法勝寺であったとしても大乘会の場面ではない。年中行事としての重要性を勘案すれば、六勝寺いずれかの修正会である可能性が考えられる。院の身体護持をつうじて鎮護国家を祈願する六勝寺の修正会は、天皇の身体護持をつうじて

国家の安穩を祈る御齋会と対をなし、六勝寺の仏事のなかではとくに重要なものであった¹⁶。

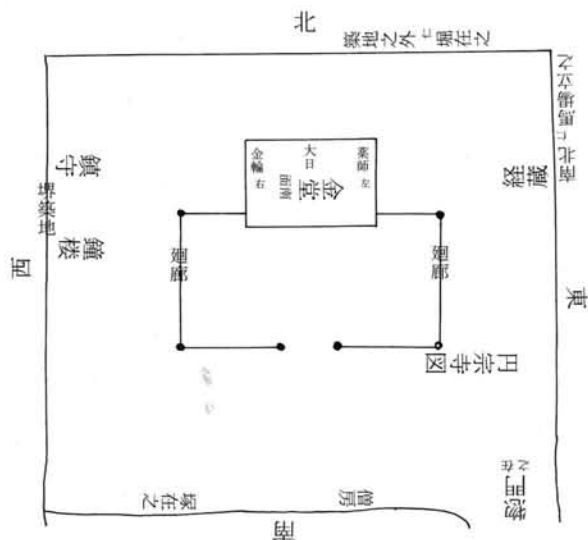
さて、平泉の毛越寺金堂・嘉祥寺本堂ともに、中堂には裳階がもうけられていた。平泉においては、仏事における裳階の用途を示す史料はみいだされていないが、こうした象徴的な空間を模倣していたことは、奥州藤原氏による法会の在り方を考えるうえでも興味深い。鎌倉の永福寺になると、左右の薬師堂・阿弥陀堂には裳階はみられず、中央の二階堂のみに裳階を想定する説もあるが、もうけていなかった可能性が高い¹⁷。

2.2 廻廊

平泉の寺院で廻廊はコ字型の構成をとるが、同時代の京都ではこの形態のみならず、ロ字型廻廊が並存している。

■ロ字型廻廊

ロ字型廻廊に中門を開く構成は、東大寺をはじめ奈良時代以前の伽藍ではもっとも一般的にみられるものであり、平安時代にいたっても東寺金堂や醍醐寺金堂などに継承されている。平安時代後期の円宗寺金堂は、法勝寺の先駆型ともみられているが¹⁸、同じくロ字型廻廊の構成が考えられるので詳しくみておくことにしよう。

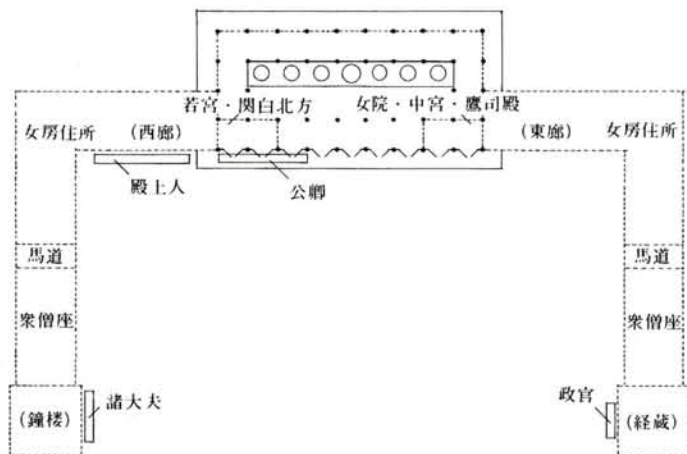


【図③】顕證本『仁和寺諸院家記』所収円宗寺伽藍図
(奈良国立文化財研究所『仁和寺史料 寺誌編一』所収図版より作成)

(1102) 建立の尊勝寺金堂も、「尊勝寺供養記」によりロ字型廻廊に中門を開く伽藍構成であったと考えられている。尊勝寺では、このほか主要な建築として講堂・灌頂堂が知られるが、これは円宗寺にもみられ、円宗寺は法勝寺ではなく尊勝寺の規範になっていたのである。

さらに、天喜6年(1058)の火災後、承徳元年(1097)に再建された法成寺新堂もロ字型廻廊をとっていたと考えられる¹⁹。『中右記』同年10月17日の条には、

今日有法成寺新堂供養、(中略)御堂讃岐守行家朝臣作之、中門廻廊安芸守有俊朝臣各募重任功所造畢、とあり、中門・廻廊の存在が知られる。次に述べるように、この新堂はもとコ字型廻廊の先端に鐘楼・経蔵をおく構成(【図④】)であったものが、再建によってロ字型廻廊にかわった。金堂の背後にロ字型廻廊の建築



【図④】法成寺新堂復元平面図(清水擴『平安時代仏教建築史の研究』より)

よう。

前掲「円明寺供養式(後改円宗寺)」には金堂の廻廊について、

同剋打衆僧集会鐘、僧侶着南門外幅、(中略)誦経僧等入自中門、敷草座於東西廊、(中略)率衆僧経同道、東西相分、至僧座前、留立標下、

とあり、「南門」とは別に「中門」、さらに「東西廊」があらわれ、これは金堂の前庭を取り囲む廻廊と中門があったことを示している。

顕證本『仁和寺諸院家記』には「円宗寺図」(【図③】)がのせられるが、円宗寺金堂はまさにこうした構成であったと考えられる。康和4年

がおかれる事例として、東寺食堂が知られる(【図⑤】を参照)。

■コ字型廻廊

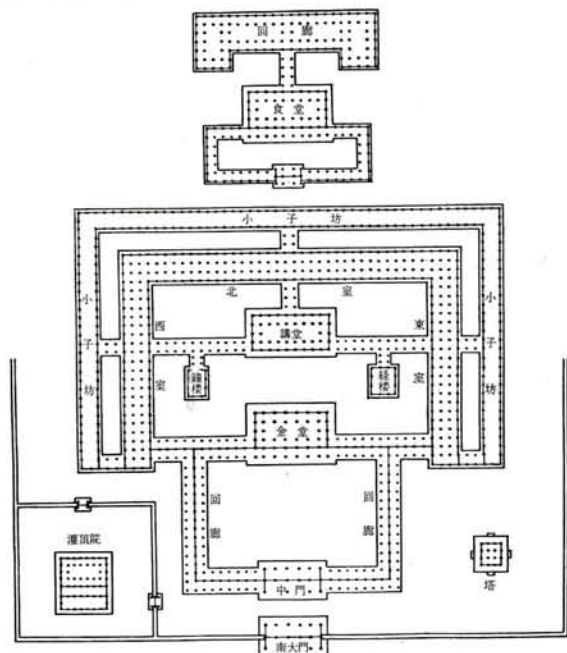
コ字型廻廊をとる最初の事例として知られるのが、永承5年(1050)供養の法成寺新堂である²⁰。この後になって、天喜元年(1053)の平等院鳳凰堂、承暦元年

(1077)の法勝寺金堂、元永年(1118)再建の仁和寺金堂をはじめ、毛越寺金堂・嘉祥寺本堂とコ字型廻廊の建築があいついで建立される。

法成寺新堂は『春記』永承5年(1050)3月16日の条に、

法成寺内金堂後立七間瓦葺堂一字東屋、無雲殿、南向。(中略)東西有廊、更南折其東西有經藏鐘樓經藏東西。(中略)經藏下為政官座、鐘楼下為諸大夫座、

とあるように、金堂の背後に建立され、裳階をそなえない寄棟造の建築で、廻廊は東西とも南に折れ、その先端に鐘樓・經藏をおいていたことが知られる(【図④】)。中尊として二丈三尺の大日如来をすえ、その左右に丈六脇侍3体ずつを安置していた。



【図⑤】東寺伽藍復元図(大岡実『南都七寺の研究』より)

この建築構成は、「浄土教建築」の系譜に位置づけられているが²¹、それはむしろ東大寺・東寺(【図⑤】)の講堂と、それに廻廊でつながれた鐘樓・經藏の構成と一致している点が注目される。これら古代伽藍の講堂から、三面僧房とそれに取り付く廻廊を取り去れば、それはまさに法成寺新堂の構成になる。さらに、法隆寺では、講堂・鐘樓・經藏は、金堂・五重塔を囲むロ字型廻廊の外に独立して位置していたものが、平安時代中期に背面の廻廊が切り取られ、廻廊は鐘樓・經藏とつながり、講堂に取り付いた²²。法成寺講堂や法勝寺・毛越寺の金堂で、浄土図のようなたんなる楼閣ではなく、鐘樓・經藏という性格の明確な建築をおくのは、こうした古代伽藍を継承した結果とみなされるべきである。

さらにいえば、この新堂は金堂の背後にあり、また法成寺が火災にあった天喜6年(1058)2月23日の『扶桑略記』の記事に「講堂」とあることから講堂とみなされるが、ここに薬師寺や円宗寺・法勝寺の講堂のような、最勝会・法華会・大乘会などという論義会につながる性格や空間構成は見いだせない。円宗寺・法勝寺とも講堂の中尊は釈迦如来であり、中尊を二丈三尺もの巨大な大日如来とする法成寺新堂は、法成寺金堂や法勝寺金堂につうじる、さらに、『百鍊抄』ではこの大日如来を「毘盧遮那仏」と呼んでおり、これは次に述べるように密教の大日如来と顕教の毘盧遮那仏とをあわせた、法成寺・法勝寺金堂の中尊につうじる。

つまり、法成寺新堂は、円宗寺講堂・法勝寺講堂につながっていくものではなく、第二の金堂ともいうべ

建築名	建立年代	中尊	脇侍					
法性寺本堂	10世紀	毘盧遮那仏						六天
積善寺(法興院)	正暦5年(994)	丈六毘盧遮那仏	釈迦	薬師				
世尊寺	長保3年(1001)	大日如来			普賢	十一面観音	不動	降三世
法成寺金堂	治安2年(1022)	三丈二尺大日如来	釈迦	薬師	文殊	弥勒		六天
円教寺御願堂	長元7年(1034)	丈六大日如来	釈迦	薬師				六天
法成寺新堂	永承5年(1050)	二丈六尺大日如来	釈迦	薬師	延命	不空罽索	不動	大威徳 四天王
平等院本堂	永承7年(1052)	大日如来	釈迦	薬師				
円乗寺御願堂	天喜3年(1055)	丈六釈迦如来			普賢	文殊	延命	如意輪
円宗寺金堂	延久2年(1070)	二丈大日如来	一字金輪	薬師				六天
法勝寺金堂	承暦元年(1077)	三丈二尺大日如来	多宝	開敷花	無量寿	天鼓雷音		六天
円勝寺金堂	大治3年(1128)	二丈大日如来	胎藏界四仏					
金剛心院釈迦堂	久寿元年(1154)	丈六釈迦如来			普賢	文殊		
清衡願文伽藍	天治3年(1126)	丈六金色釈迦三尊						
毛越寺金堂	12世紀半ば	丈六薬師・十二神将						
嘉祥寺本堂	12世紀後半	丈六薬師						

【表①】平安時代氏寺・御願寺伽藍の中心

き建築であり(【表①】を参照)、それは法勝寺金堂の前身形といえるのである。法成寺新堂が法勝寺金堂の規範であったとすることが認められるならば、法勝寺金堂は「浄土教伽藍」ではなく、古代伽藍からの系譜に位置づけられなければならない。

3. 平安時代伽藍を支える理念

3.1 安置仏

清衡願文伽藍では釈迦、毛越寺金堂・嘉祥寺本堂では薬師であり、同時代の京都の氏寺や御願寺とは大きく異なることは、すでに別稿で指摘した²³。ここでは、金堂の中尊の問題について考えてみたい。

■伽藍の中心としての毘盧遮那仏・大日如来

摂関期から院政期の京都では、金堂の中尊は大日如来が主流であった。【表①】をみていくと、平安時代初期には奈良時代の理念を継承して毘盧遮那仏が中心であるが、11世紀になると金堂の安置仏は大日如来を中尊とし、脇侍に釈迦・薬師をおく事例が多くみられる。関白道隆が建立した積善寺について、『扶桑略記』正暦5年(994)2月20日の条に、

安置金色丈六毘盧遮那仏像一体、脇侍釈迦薬師各一体、梵王帝釈四天王各一体、図絵釈迦一萬体、とあるように、東大寺毘盧遮那仏にみる『梵網經』にもとづく仏教的世界観は、平安時代にも継承されていたのである。それをさらに展開した法成寺・法勝寺の毘盧遮那如来(大日如来)は、大日如来でありながら東大寺大仏殿の毘盧遮那仏の蓮華座の千釈迦をあらわした、顕密融合の大日如来であった。法成寺・法勝寺の伽藍では、この顕密融合の中尊が、顕密の多様な仏堂の多様な本尊を、両界曼荼羅の理念によって統括していたのである²⁴。建築・本尊、さらには伽藍構成理念いずれにおいても、法勝寺ではなく法成寺にこそ新奇性と復古性の双方をみとめなければならない。

ところが、平泉の毛越寺・嘉祥寺伽藍において、金堂中尊さらにはそれをとりまく諸堂にも、こうした宗教的世界観をみいだすことはできない。平泉では、中心としての大日如来はおろか、五大堂や七仏薬師堂・愛染堂など、京都で隆盛をきわめていた密教修法にもとづく仏堂がほとんどみられないのである²⁵。建築さらには都市計画レベルで白河の六勝寺にならいながら、その思想的な側面、すなわち伽藍構成理念までは継承していない。清衡願文伽藍の釈迦、基衡の毛越寺・嘉祥寺の薬師をみると、金堂の大日如来の脇侍と共通し、あえて大日如来をさけているようにもみえる。

■光背化仏としての大日如来の意味—両界曼荼羅にもとづく仏教的世界観—

しかし、平泉が京都で主流を占めた両界曼荼羅にもとづく仏教的世界観を受容していなかったかといえ、必ずしもそうとはいえない。まず、清衡願文伽藍の三重塔には毘盧遮那如来三尊が安置され、『吾妻鏡』注文によれば中尊寺には両界曼荼羅を象徴する両界堂があった。さらに中尊寺には、12世紀半ばの丈六仏の光背化仏とみられる仏像が10体残され²⁶、これら化仏のなかに大日如来(金剛界)がふくまれている。

文献史料では勝光明院阿弥陀堂の中尊、具体的作品では浄厳院阿弥陀如来像(重要文化財)や、後補ではあるが平等院鳳凰堂阿弥陀如来像(国宝)など、平安時代後期の阿弥陀如来像には、光背の頂上部に化仏として大日如来をそなえる事例が数多く確認される。別稿で詳しく論じることであるが、こうした化仏の大日如来は、両界曼荼羅にもとづき、大日如来に統括される阿弥陀如来の位置づけをあらわしていると考えられる。つまり、金堂を中心とする総合的伽藍が法勝寺において頂点をきわめ、その後は六勝寺造営と並行しながらも、次第に鳥羽の勝光明院のような阿弥陀堂を中心とする伽藍へと移行するなかで、両界曼荼羅にもとづく仏教的世界観も伽藍から個別の仏堂のなかに集約されていったのである²⁷。中尊寺の光背化仏の大日如来が



【図⑥】平等院鳳凰堂仏後壁画 空間構成概念図
(東京国立博物館蔵田中訥言模本をもとに作成)

いずれの仏堂の尊像のものであったか明らかでないが、これが平泉の仏像のものであったとするならば、こうした造形理念としての両界曼荼羅にもとづく仏教的世界観が平泉にもたらされていたことはじゅうぶん考えられる。

中世顕密主義には、大日如来＝毘盧遮那仏＝天照大神＝天皇という観念があった。後白河法皇の蓮華王院総社において、二十二神をはじめ主要な神々が勧請されるなか、皇祖神である伊勢の勧請が憚られたように²⁸、京都との密接な関係をもつ奥州藤原氏には、大日如来を頂点とする伽藍の建立が憚られたとも考えられよう。あるいは、大日如来を

中心とする伽藍が法勝寺で頂点をきわめた以上、こうした伽藍の再生産は意味をなさなくなったのかもしれない。結果、鳳凰堂仏後壁の理念にもとづき、阿弥陀堂をはじめ個別の信仰にもとづく仏像の造営に向けられていったといえよう。強大な中心をそなえた伽藍の再生産は、後白河法皇による東大寺大仏殿の再建を待たねばならない。

3.2 平等院鳳凰堂仏後壁にみる伽藍観—鎮護国家のための伽藍と極楽往生のための伽藍—

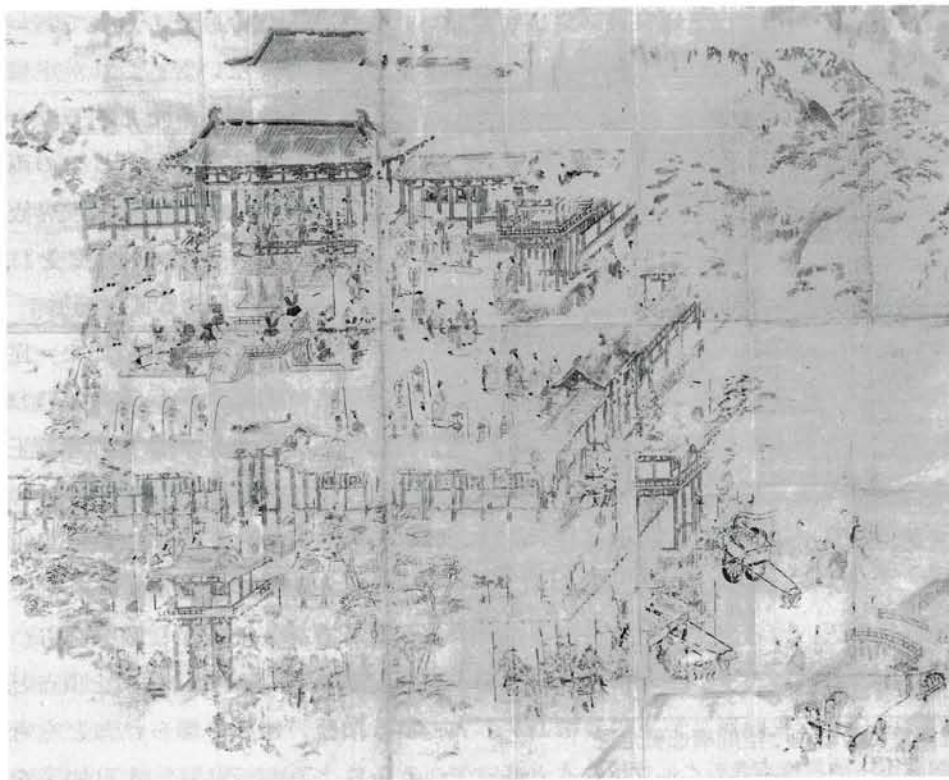
もう一つ、平安時代後期の伽藍で注意すべき点は、同時代の浄土図に描かれた伽藍との関係である。前稿で述べたように、平等院鳳凰堂仏後壁画（【図⑥】）左下の伽藍（【図⑦】）や富貴寺大堂仏後壁画の伽藍は、建築形態からみて大極殿と、鳳凰堂の右上伽藍は鳳凰堂そのものときわめて近い関係にあるなど、現実の伽藍と密接な関係をもっていた²⁹。

これらのなかでも、とくに鳳凰堂仏後壁画は明確な理念のもとに構成されており、それは12世紀の伽藍観として重要な意味をもったと考えられる。すなわち、左下に鎮護国家を祈る四神相応思想に支えられた此岸の伽藍、右上に極楽往生を願う彼岸の阿弥陀浄土の伽藍を対置し、現世の安穩から来世の極楽往生を願う、仏教にもとづく理想世界が示されていると考えられるのである。この仏後壁画は、鳳凰堂が藤原忠実によって大きな修理を受けた康和3年(1101)の作とみられている³⁰。このとき忠実が藤原氏長者となったばかりで、藤原氏にとってきわめて重要な法成寺もあわせて修理していることに注意したい³¹。仏後壁画のうち右上の伽藍は、一見してそれが平等院鳳凰堂をもとに描かれたものであることがわかり、とすればそれに対置される左下の此岸の伽藍には法成寺が投影されていると考えることができるからである。

ここでは前稿の考察を補うべく、此岸の伽藍を示すとみられる左下の伽藍について、田中訥言模本³²を援用し、くわしくみていくことにしよう。

■左下伽藍の構成と建築形態

左下伽藍をみていくと、金堂には裳階はなく、側面に妻戸をもうけるのにたいし、正面の柱間では扉もな



【図⑦】平等院鳳凰堂仏後壁画左下伽藍部分
(東京国立博物館蔵田中訥言模本)

くすべて開放されており、この点は大極殿と共通する。正面の階段は中央柱間ではなく、その左右の柱間にもうけられているが、この形式は『兵範記』仁平元年(1151)6月1日の条所収の福勝院九体阿弥陀堂の指図にみることができ、また金剛心院九体阿弥陀堂(【図①】を参照)でも中央の両脇柱間のみ中間にも縁束礎石をおくことから、同様の階の構成を想定することができる。基壇に高欄をまわす点は、『年中行事絵巻』御齋会の大極殿

や鷹司本『年中行事絵巻』推定法勝寺金堂にも共通する。さらに、基壇か縁かは判明しないものの、法勝寺の講堂³³・薬師堂³⁴という伽藍の中軸線上に配置される仏堂に同様の高欄の存在が想定され、院政期には伽藍の中心的な仏堂では周囲に高欄をまわす形式が定着していたとみられる。

次に、金堂の背後には講堂に相当する建築が屋根のみ描かれるが、これは大極殿に対する小安殿とみることができる。ただし、この建築の向かって右側には廻廊がとりついているのがみえ、しかもそれは前方に折れ曲がっている。廻廊先端は確認できないが、この廻廊の形態は法成寺新堂の形式をうけたものとみられる。さらに金堂の左側には、入母屋造で鴟尾を戴き、妻を正面に見せる屋根、その後に宝形造の屋根がみえる。これらの屋根の建築と金堂・講堂との接続部分は、樹木や霞によって隠され、また剥落もあるため明確にならないが、前者が金堂の廻廊、後者が講堂の廻廊につながれた楼閣をあらわしている可能性が考えられる。金堂の左側の楼閣は、右側の屋根と同じ程度の大きさの入母屋造・妻入であり、鴟尾を戴く点も一致している。左側の屋根は、金堂の楼閣と考えるには配置がやや後方にズレているが、この仏後壁画では左下伽藍の金堂・講堂と南大門・中門の中軸線に大きなズレがあり、また右上伽藍でも前方左右の楼閣は上下の位置関係にズレが認められ、同様の絵画表現の問題とみなされよう。

すでに、金堂の廻廊の全体構成が大極殿院の廻廊と共通することを指摘したが、コ字型廻廊先端の楼閣の横で、前方の廻廊と切れているところからは、コ字型廻廊とロ字型廻廊の複合形式ということもできる。鳳凰堂仏後壁画の制作年代に比定されている康和3年は、尊勝寺金堂が造営される時期とかさなってくる。この此岸の伽藍は、その意図するところは平等院鳳凰堂に対する法成寺金堂・講堂とみなされようが、より観念的な鎮護国家伽藍の理想像として、その建築形式は王権の大極殿や法勝寺・尊勝寺の金堂など、現実の鎮護国家のための建築を融合してつくりあげられたものといえよう。したがって、この金堂の中に安置されている中尊は、平安時代中期以降の天皇貴族伽藍で主流を占めた大日如来(【表①】)か、もしくは大極殿での鎮

護国家法会である御齋会にさいして本尊となる毘盧遮那仏がふさわしい。印相は、治承4年(1180)の焼失前の大仏殿を描いたとされる『信貴山縁起』尼公大仏殿参籠場面の毘盧遮那仏に近く、あるいは釈迦・弥勒³⁵などの可能性が考えられるが、これまでの視点を総合すると毘盧遮那仏とみるのが妥当であろう。

■阿弥陀堂の独立—伽藍の都市空間への展開—

左下伽藍全体をみると、法成寺や六勝寺などの当時の伽藍とはことなり、個別の仏堂や塔がみられない点に注意される。金堂・講堂の左にある屋根も、先にみたようにそれぞれに付属する楼閣をあらわしていたとすれば、個別仏堂はまったく描かれていないことになる。この仏後壁画が成立した時代の法成寺や法勝寺伽藍では、多様な仏堂がもうけられ、多くの塔が林立していた³⁶。ここで問題とする阿弥陀堂についても、法成寺や法勝寺にならうならば金堂の向かって右側に位置するはずであるが、訥言模本ではこの部分に樹木が描かれている。また、この部分では剥落がはげしく不明瞭な点もあるが、もしここに建築が描かれていたとしても、右側の回廊との位置関係からそれは廻廊であり、阿弥陀堂が描かれていたとは考え難い。

鳳凰堂仏後壁画にあらわれた、鎮護国家のための伽藍と極楽往生のための伽藍という二元的構成は、京都においては法成寺金堂・六勝寺金堂・大極殿と平等院鳳凰堂・勝光明院阿弥陀堂、平泉においては清衡願文伽藍・毛越寺・嘉祥寺と無量光院阿弥陀堂の関係にあてはめられる。この理念は、平等院鳳凰堂を法成寺や法勝寺と相対化したうえで、その位置づけを示すものといえようが、それは同時に、阿弥陀堂の独立を正当化する論理としても機能したと考えられる。尊勝寺を最後に六勝寺では阿弥陀堂が造営されなくなり、鳥羽や白河には阿弥陀堂を中心とする伽藍が盛んに建立されるようになる。これは、金堂を中心とする伽藍から阿弥陀堂が独立したことをあらわす。

阿弥陀堂の独立を正当化したのはこれだけではない。そもそも法成寺や法勝寺伽藍には、両者を包括する信仰の総合性に特徴があり、法成寺や法勝寺において、〔阿弥陀堂=阿弥陀如来〕は伽藍のなかで〔金堂=大日如来〕に統括されていた³⁷。鳳凰堂が中心のようにみえる平等院といえども、創建当初の中心は大日如来を安置する本堂であり、鳳凰堂はそれに統括される一仏堂という位置づけだったのである。しかし、両界曼荼羅の理念にもとづく諸尊の関係は、伽藍内におさまるものではなく、伽藍という枠をこえ、山などの周辺環境へと展開する。さらに、院政期には東寺を金剛界曼荼羅、南山(高野山)を胎藏界曼荼羅とみなす³⁸など、はるかはなれた伽藍を、密教の両界曼荼羅の理念をもって一体としてとらえる言説もあらわれる。換言すれば伽藍を統括する両界曼荼羅の理念は、伽藍という枠をこえて展開したのであり、これにより法成寺・法勝寺の金堂と平等院・勝光明院などの阿弥陀堂は互に関係をもつことができたのである。つまり、鳳凰堂仏後壁画は、両界曼荼羅にもとづく伽藍構成理念とも密接に関わって、院政期の伽藍観を成り立たせていたと考えられる。

また、鳳凰堂仏後壁画の理念は、金堂(講堂をふくむ)からなる左下伽藍と、阿弥陀堂からなる右上伽藍のみで成り立つが、これは法成寺や法勝寺伽藍にみられるような、当時の仏教に求められた多様な役割を、鎮護国家と極楽往生に純化した姿として描いたものといえよう。六勝寺伽藍では、法勝寺を頂点に尊勝寺から延勝寺へと至る過程で、金堂が中心に据えられることは不変ながら、次第に個別の仏堂の数を減らしていくが、この動きは鳳凰堂仏後壁画の理念と一致している。そして、金堂と阿弥陀堂の関係に純化された二元的構造を、都市空間として実態化したのが平泉であった³⁹。

平泉の寺院の特質として、五大堂など当時の京都で盛んに建立された密教修法のための仏堂がみられないことはすでに指摘した。平泉では、比較的多種の仏に対する信仰のあらわれていた清衡の中尊寺から、阿弥陀如来のみに集中する秀衡の無量光院へと、信仰の幅が狭くなっていく傾向が認められる。しかも、清衡願

文伽藍で3基の塔があらわれる点は京都と共通するが、毛越寺には1基もあらわれない。こうした平泉の伽藍の変遷は、清衡期のそれが京都の六勝寺伽藍の影響を受けていたのにたいし、基衡・秀衡期には仏後壁画をはじめ鳳凰堂の影響がより強くなっていったためと考えられる。

おわりに

これまで平泉の無量光院阿弥陀堂はいうまでもなく、毛越寺や嘉祥寺の伽藍は、京都の平等院鳳凰堂をはじめ法成寺や法勝寺などとともに「浄土教伽藍」と呼ばれ、平安時代後期の伽藍はあたかも「浄土教」に支配されたかのようにとらえられてきた。しかし、これらの伽藍は、建築形式のうえでは古代伽藍の影響を、伽藍構成理念においては密教の影響を多分に受けて成立していた。以下に、その要点を述べる。

まず、建築形式については、

- ① 平安時代後期の伽藍構成は、古代的なロ字型廻廊の伽藍に対し、平等院鳳凰堂や法勝寺金堂などにみられるコ字型廻廊の伽藍が主流になっていたととらえられてきた。しかし、円宗寺や尊勝寺の金堂はロ字型廻廊の形式をとり、古代伽藍の系譜を直接引き継いでいる。
- ② 浄土教伽藍の特徴とされ、法成寺新堂から法勝寺金堂へと継承されるコ字型廻廊の構成は、東大寺や東寺の古代伽藍の講堂と鐘楼・経蔵を廻廊でつなぐ構成を継承・展開したものといえる。
- ③ 古代伽藍の系譜は、法成寺から円宗寺・法勝寺・尊勝寺へとつながっており、法勝寺伽藍にあたえられた「復古的」という評価は適切とはいえない。
- ④ 平泉では、毛越寺・嘉祥寺・無量光院がコ字型廻廊をとり、さらには遺構として確認されていない清衡願文伽藍の廻廊もコ字型であったとすれば、徹底してコ字型廻廊を採用した点に特徴があるといえる。
- ⑤ 毛越寺金堂は、全体構成は法勝寺金堂を規範としたとみてよいが、それを単純に縮小したものではない。例えば廻廊は単廊を基本とし、その構造補強のために中央に掘立柱筋を加えたものと理解され、平等院鳳凰堂など二階単廊の影響が考えられる。
- ⑥ 嘉祥寺本堂は、平面計画においては毛越寺金堂を規範としながらも、中堂・廻廊とも板敷の床を設け、廻廊の先端に鐘楼・経蔵などはなく、苑池に向かってのびていく可能性があるなど建築形式がことなる。これは金堂など古代的伽藍の中心となる建築の変化を示しており、鎌倉の永福寺の規範になっていた可能性が高い。

という点が指摘できる。次に、伽藍構成理念に関わる側面としては、

- ⑦ 平等院鳳凰堂仏後壁画では、金堂を中心とする此岸の鎮護国家のための伽藍と、阿弥陀堂を中心とする彼岸の極楽往生のための伽藍が対置され、大極殿・法成寺金堂・法勝寺金堂に対する鳳凰堂の位置関係が示されている。同時にこの伽藍観は、鳥羽勝光明院などの阿弥陀堂を中心とする伽藍の造営を正当化する理念になっていったと考えられる。
- ⑧ 平安時代後期伽藍は、大日如来と毘盧遮那仏を一体にした顕密融合の中心が、両界曼荼羅の理念のもと、伽藍全体を統括する点に特徴がある。法成寺・法勝寺のように、もとは[金堂＝鎮護国家]という中心によって同一の伽藍内で統括されていた個別の[阿弥陀堂＝極楽往生信仰]は、伽藍という枠をこえて展開した。鳳凰堂仏後壁画の左下伽藍は、阿弥陀堂が右上伽藍として独立した後の姿を示す。
- ⑨ 平泉の伽藍には、京都の法成寺や法勝寺のような、両界曼荼羅にもとづく伽藍構成理念はみられない。中尊寺蔵の化仏大日如来像の存在は、むしろこれらの伽藍以降、勝光明院など両界曼荼羅の理念が阿弥

陀堂など個別の仏堂に集約された形態として受容されていたことを示す。

- ⑩ 鳳凰堂仏後壁画にみられる伽藍観は、平泉でも鎮護国家のための伽藍である清衡願文伽藍・毛越寺金堂・嘉祥寺本堂と、極楽往生のための伽藍である観自在王院・無量光院阿弥陀堂の関係にみることができ、とくに毛越寺金堂・講堂と無量光院阿弥陀堂の関係には、それが直接的に反映されているといえる。すなわち、平安貴族の多種多様な信仰を、鎮護国家のための伽藍と極楽往生のための伽藍に純化した鳳凰堂仏後壁画の伽藍観を、都市空間として実態化したのが平泉であった。

【註】

- 1 清水擴「浄土教寺院の伽藍構成とその系譜」(同『平安時代仏教建築史の研究』中央公論美術出版、1992)。
- 2 富島義幸「法勝寺の伽藍形態とその特徴」(『日本建築学会計画系論文集』516、1999)。
- 3 富島義幸「白河一院政期「王家」の都市空間」(院政期文化研究会編『院政期文化論集 第三巻 時間と空間』森話社、2003)。
- 4 富島義幸「平泉の都市空間と仏教建築—白河・鳥羽院政期の京都との比較から」(『日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集 都市・平泉—成立とその構成—』、2001)。
- 5 杉山信三「鳥羽殿とその御堂」(『院家建築の研究』吉川弘文館、1984)。
- 6 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡Ⅰ 金剛心院跡の調査』(2002)。
- 7 『吾妻鏡』文治5年(1189)12月9日の条。
- 8 『吾妻鏡』建久3年(1192)10月29日の条。
- 9 寸法をみても、桁行の9尺は、無量光院廻廊および平等院廻廊の東西方向部分と一致する。梁行の14尺も、単廊である無量光院・平等院の13尺と1尺、金剛心院・永福寺とも2尺しか違わず、これを複廊として二分すれば1間あたりの梁行は7尺という狭いものになる。複廊の場合、廻廊の梁間は法勝寺金堂・薬師寺講堂で10尺×2間で20尺、興福寺では12尺×2間で24尺もある。毛越寺金堂と平等院鳳凰堂・無量光院阿弥陀堂との廻廊梁行の1尺の差は、廻廊の取り付く部分の中堂柱間にそろえた結果とみなされる。
- 10 嘉祥寺についても中央柱筋がある南北方向の廻廊は二階廊とみてよく、中堂左右の廻廊は板敷などで補強されているため、中央の掘立柱が必要なかったとの理解が可能である。なお、永福寺廻廊においても、Ⅰ期の礎石からⅡの掘立柱、Ⅲ期の礎石へという変遷があり、またこの廻廊の中門にも掘立柱が使われている(鎌倉市教育委員会『永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書』、2002)。寺院建築にも、掘立柱が多用されていたことが知られよう。
- 11 足立康「本薬師寺塔婆に関する疑問に就いて」(『考古学雑誌』20-11、1930、後に『古代建築の研究』上(中央公論美術出版、1986)に再録)、同「法成寺三重塔考」(『考古学雑誌』21-2・3、1931、後に前掲『古代建築の研究』上に再録)、杉山信三「法成寺について」(前掲註5杉山著書)、富島義幸・高橋康夫「法成寺の塔について」(『仏教芸術』228、1996)。
- 12 法性寺本堂は礼堂をそなえ、天皇御願寺でも長元7年(1034)再建の円教寺御願堂には礼堂の存在が知られる。清水擴「四円寺の構成と性格」(前掲註1清水著書)を参照。
- 13 富島義幸「相国寺七重塔—安置仏と供養会の空間からみた建立の意義—」(『日本宗教文化研究』5-1、2001)。
- 14 『朝野群載』巻第二所収。顕證本『仁和寺諸院家記』には古徳記を引いて、「元名円明寺、後三条院御願」と、もと円明寺という寺名であったとする。
- 15 福山敏男「年中行事絵巻の推定法勝寺大乘会図」(同『日本建築史研究』墨水書房、1968)。
- 16 法勝寺修正会の性格については、前掲註3富島論文を参照。この点については、別に詳しく論じることしたい。
- 17 鈴木亘「永福寺跡建築遺構の考察」(鎌倉市教育委員会『永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書』、2002)では、中堂の背面の雨落ちまでの距離を考慮し、これを裳階の礎石とする。身舎の柱筋から雨落ちまでは14尺あり、身舎の軒の出はきわめて大きくなる。ただし、同じく瓦葺で三手先組物をもちいる平等院鳳凰堂では12.7尺、古代の大規模な仏堂の事例では唐招提寺金堂が14.5尺であり、不可能とはいえない。また、裳階とみなされる柱筋の礎石は、遺跡の状況が良好な二階堂の正面側では確認されておらず、また礎石の規模も身舎にくらべるとあまりにも小さく、縁を受ける束など、据えつけの浅いものであったと考えられる。
- 18 前掲註12清水論文において、円宗寺金堂の廻廊については東西に存在し、それが南に折れていたことが述べられるが、その全体構成は明かにされていない。
- 19 前掲註11杉山論文において、この中門は金堂の南、南大門の後ろにある中門とみなされる。
- 20 前掲註11杉山論文、清水擴「法成寺伽藍の構成と性格」(前掲註1清水著書)。
- 21 前掲註1清水論文。
- 22 『奈良六大寺大観 第一巻 法隆寺一』(岩波書店、1972)所収、太田博太郎「大講堂」、沢村仁「廻廊」・「経蔵」・「鐘楼」解説。
- 23 富島義幸「平泉の都市空間と仏教建築—白河・鳥羽院政期の京都との比較から」(『日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集 都市・平泉—成立とその構成—』、2001)。
- 24 富島義幸「両界曼荼羅と中世神仏世界」(『名古屋造形芸術大学紀要 第十号 曼荼羅のシステムと造形』、2004)。

- 25 富島義幸「平泉・建築とその空間」(『平泉文化フォーラム2000 瓦からみた平泉文化』、2000)。
- 26 有賀祥隆代表『平成八・九・十年度科学研究費補助金(基盤研究A1)研究報告書 中尊寺を中心とする奥州藤原文化圏の美術工芸品に関する総合的調査研究』(1999)
- 27 勝光明院阿弥陀堂において、阿弥陀堂空間に両界曼荼羅の理念が明確にあらわれるようになるが(富島義幸「阿弥陀堂における両界曼荼羅空間の展開」(『日本建築学会計画系論文集』544、2001))、これも同じ動きとしてとらえられるべきである。
- 28 竹居明男・吉澤陽『吉記』逸文承安四年(安元元年)六月十六日条をめぐって(『文化史学』57、2001)、上島享「日本中世の神概念と国土観」(一宮研究会編『中世一宮制の歴史的展開 下 総合研究編』(岩田書院、2004))。
- 29 富島義幸「平安時代後期における浄土のイメージと建築造形—平泉 無量光院・毛越寺を中心に—」(岩手県教育委員会『平泉文化研究年報』第4号、二〇〇四)。なお、鎌倉時代後期の作ではあるが、金戒光明寺蔵地獄極楽図(重要文化財)の極楽の伽藍が、永福寺の伽藍とき類似していることも注目されよう。
- 30 大原嘉豊「平等院鳳凰堂本尊後壁表面画主題に関する試論」(『仏教芸術』247、1999)。
- 31 『殿暦』同年4月25日の条。
- 32 『平等院大観 第三巻 絵画』(岩波書店、1992)所収「東京国立博物館蔵田中訥言模本」。
- 33 『中右記』元永元年(一一一八)十月二十四日の条には、「次入御講堂御所^三閨白以下諸卿令候南高欄下座給^四。」とあり、前庭東部分の御所に対し、基壇上東側高欄際の高欄座が示される。
- 34 尊勝寺・最勝寺の結縁灌頂について記した『阿婆縛抄』卷第十三「両寺灌頂記末」では、尊勝寺灌頂堂と建築名不明の七間四面堂の灌頂指図があげられる。最勝寺灌頂は延応元年(1239)には法勝寺薬師堂を会場としたことが知られ、『門葉記』「灌頂五」に法勝寺薬師堂で結縁灌頂が修された指図が残る。『阿婆縛抄』所収の七間四面堂は、『門葉記』所収指図の建築と須弥壇の構成をふくめた平面形式が一致することからも、法勝寺薬師堂とみなしてよいと考えられる。
- 35 本稿とは別の視点、すなわち左下伽藍も浄土を表すものとして検討した大原氏は、前掲註30論文においてその主題を弥勒下生とし、中尊を弥勒とみなす。
- 36 個別仏堂の変遷は、前掲註3富島論文所収表①「法成寺・円宗寺・六勝寺の建築・安置仏」を参照されたい。
- 37 前掲註24富島論文。
- 38 平安後期から鎌倉時代にかけて成立した「高野山秘記」(『真福寺善本叢刊9 中世高野山縁起集』(臨川書店、1999)所収)に、「東寺者、東曼荼羅、金剛界宮、(中略)南山者、南理智事、胎藏界宮」とある。
- 39 前掲註29富島論文。

【付記】本稿でもちいた図版のうち、【図④】は清水擴『平安時代仏教建築史の研究』より、【図⑤】は大岡実『南都七大寺の研究』(中央公論美術出版、1966)より転載し、【図⑦】は奈良国立博物館より提供いただいた。【図②】は『大正新脩大藏經 図像第11巻』所収図版、【図③】は奈良国立文化財研究所『仁和寺史料 寺誌編一』所収図版、【図⑥】は東京国立博物館蔵田中訥言模本をもとに作成した。貴重な史料をご提供いただき、また掲載許可をいただいた方々に御礼申し上げる。

安倍氏の柵の構造(2)―居館としての柵―

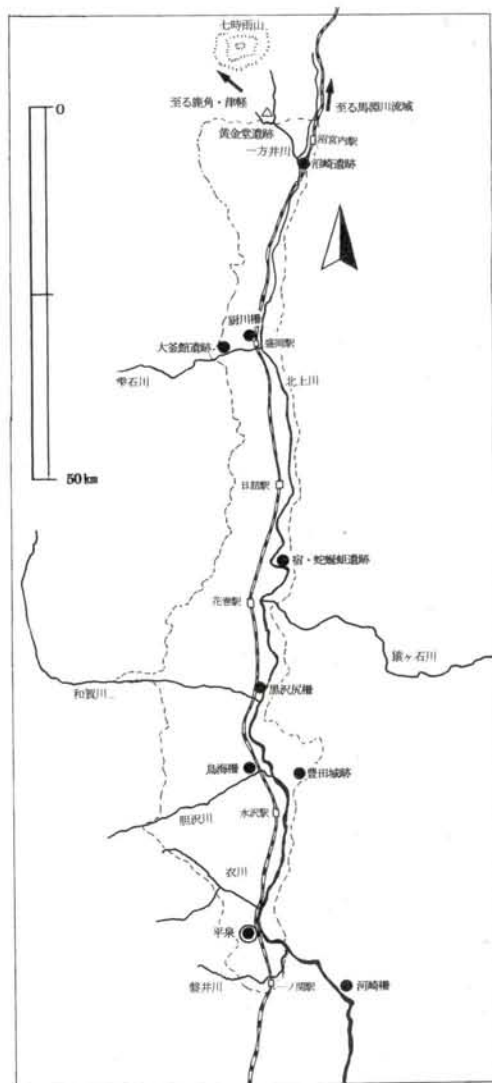
羽 柴 直 人

1 はじめに

昨年度は「交通遮断施設」の視点から安倍氏の柵について考察した(羽柴2004)。これは合戦に際して設置される臨時のバリケード、阻塞の類で、交通の要衝である平地の狭隘部に設置されるものと位置付けた。しかし柵の中には居館としての機能を有する施設の存在もあることを否定したわけではない。「柵」と称される施設の内容は一様ではないと考えるのである。ここで「柵」の用語について考えてみる。陸奥話記(註1)では12箇所の施設が「柵」として登場する。大平聡氏は安倍氏の「柵」の名称について考察されているが、陸奥話記で「柵」と記された施設が、陸奥話記の原史料になったと推測される『朝野群載』所収の源頼義解状では「楯」と記されていることに注目し、陸奥話記の著者が意図的に「楯」を「柵」として統一して表記した可能性を指摘している。(大平1994)。このように、陸奥話記に記される「柵」の呼称は本来的なその施設の呼称とは異なっていた可能性が高い。今昔物語集でも「柵」を「楯」と記しており、当時の人々は「楯」の方がなじみのある用語だったのかもしれない。あるいは「柵」、「楯」どちらかの呼称であったということではなく、安倍氏自身は「交通遮断施設」と「居館」の施設の呼称を使い分けていたのかもしれない。記録を残した源氏、朝廷側の記録者が厳密に安倍氏側の呼称を区分していない可能性もある。

呼称の問題はこの程度にして、今年度は「居館」の機能を有する安倍氏の柵の構造について考察する。河崎の柵擬定地の発掘調査では約22,000㎡の調査面積で、11世紀のかわらけはおよそ100片しか出土していない((財)岩手埋文2005)。それに比較すると鳥海柵と推測される鳥海A、B、西根遺跡でははるかに多量のかわらけ(岩手県教育委員会1981 報告書に出土総量の記載はないが、掲載されたものに限っても)が出土している。これは遺跡の性格に差異があることの現れであろう。かわらけの出土量が多いということは、その場所で恒常的に生活をし、宴会儀礼を繰り返しおこなっていたことを示している。かわらけの出土量の多い遺跡が、居館としての「柵」であると考えたい。

岩手県内において、鳥海A、B、西根遺跡以外でかわらけがまとまった量出土している遺跡は、石鳥谷町宿・蛇蛭蛆遺跡((財)岩手埋文2005)、滝沢村大釜館遺跡(滝沢村埋文センター2003)、岩手町沼崎遺跡(高橋、



関連遺跡地図

八木1994)がある。調査面積が少ない遺跡(宿・蛇蛭蛆遺跡)や破壊された遺跡から採集した事例(沼崎遺跡)も含むが、単位面積あたりのかわけの出土量は河崎の柵擬定地より明らかに多い。これらの遺跡が安倍氏の居館遺跡と想定し、その立地、構造について各々検討し、安倍氏の居館の様相を考察して行く。

2 鳥海柵の構造

東北縦貫道の発掘調査(岩手県教育委員会1981)により金ヶ崎町鳥海A・B遺跡、西根遺跡で多量の11世紀中葉のかわけが出土し、この遺跡が陸奥話記に登場する「鳥海柵」と考えられている。しかしながらその調査は高速道路部分のみに限られており、また発掘調査の精度も現在の視点からすれば決して十分なものではない。このような状況であり鳥海柵の、内容、構造が十分に把握されているとは言い難い。

陸奥話記の鳥海柵に関する記述では、鳥海柵が非常に重要な施設として表現されている。このことから、鳥海柵は厨川柵と並んで、安倍氏の最重要居館と考えられる。安倍氏の本拠地と位置付けても過言ではあるまい。

「鳥海柵」の範囲を考える。鳥海遺跡、西根遺跡は低位の段丘上に立地しており、東側と南側は沖積低地に接して比高差のある急崖になっている。この地形の境界が、鳥海柵の東側と南側の境界と想定できる。しかし北側と西側は同じ段丘面が平坦に続き、地形上の境界は見出せない。北側の範囲については1978年調査がおこなわれた金ヶ崎バイパス関連の西根遺跡((財)岩手埋文1981)でも11世紀のかわけは出土しており(註2)、柵の範囲はこの調査地点にも広がっていると想定される。この調査地点の北側に存在する東西に走る埋没沢(縦街道付近)を鳥海柵の北限と仮定したい。この埋没沢から鳥海A遺跡の南端までの長さは530mにも及ぶ。

問題となるのは西側の境界である。現地表を観察しても平坦面が続き、何らの地形上の変化が存在していないのである。航空写真、地形図で観察すると、東側の境界である段丘崖から西に約570mの地点に段丘崖と平行に直線的な耕地の境界が認められる。これが鳥海柵の西の境界を示すものなのかもしれない。しかしこの境界付近は発掘調査も及んでおらず、現在では西側の境界については不明とせざるを得ない。また鳥海柵の南端である鳥海A遺跡の南側は明らかに浸食作用によって岸が削り取られている。11世紀当時には鳥海A遺跡の南北幅は現在よりも広がったと推測される。この南岸に沿って1号溝が存在し、これを柵列と解する考えもあるが(八木1989、大平1994など)、岸の浸食の度合いから考えてそれが11世紀の遺構とは到底考えられない。また類似した溝(2号溝)が北岸にも存在するが、報告書では1、2号溝のどちらも柵列であることを視わせる記述は見出せない。

鳥海柵の大きな特長は、人工の堀と見紛う直線的な開析された沢が東西に横切っていることである。これは南から、鳥海Aと鳥海B遺跡を隔てる沢、鳥海B遺跡と西根遺跡を隔てる沢、西根遺跡の中央を横断する沢、西根遺跡の北端の沢の合計4条が存在する。この4条の沢は概ね平行に走っており、鳥海柵と推測される範囲を4つの空間に区切っている。このそれぞれの空間からはいずれも11世紀のかわけが出土しており、それぞれが鳥海柵の構成要素と推測される。このように鳥海柵は複数の空間から構成される施設と解釈できる。

また東北縦貫道路の発掘調査では鳥海B遺跡で南北に走る大規模な直線的な堀が見つかった。これは人工的に掘られたものである。堀からは12世紀の国産陶器片も出土しており、11世紀から開口していた可能性は十分に考えられる。

3 宿遺跡・蛇蛭遺跡の構造

宿遺跡は石鳥谷町八重畑、蛇蛭遺跡は石鳥谷町五大堂に所在する。両遺跡は隣接しており、一連の遺跡と解釈できる。この両遺跡では、ほ場整備に関わる試掘調査および緊急調査において、鳥海柵出土のものと類似する11世紀中～後半のかわらけが多量に出土しており、安倍氏に関わる遺跡と判断できる。調査面積に比較してかわらけの出土量は多く、かわらけを使用する儀礼が繰り返しおこなわれた居館と推測される。陸奥話記に登場する12柵の中で、この遺跡に該当しそうなものは見出せない。陸奥話記には直接戦闘に関わった柵しか登場していないわけであるから、それ以外に「柵」が存在しても矛盾はないのである。

両遺跡は沢を挟んで西側が宿遺跡、東側が蛇蛭遺跡となっている。宿遺跡はその西側に中世城館八重畑館が隣接する。宿遺跡の西側部分にも八重畑館の一部分をなす郭が存在する。埋蔵文化財センター調査の宿遺跡ではその東側から多くの11世紀のかわらけが出土しており、西側では少ない。これは宿遺跡においては11世紀の居館範囲が、その東側に限られる可能性を示している。調査では堀跡が検出されているが、これは11世紀の所産ではなく、中世の八重畑館に伴うものである可能性が高い。しかしながら、八重畑館本体(宿遺跡の西側)は発掘調査が及んでおらず、11世紀の遺跡の範囲がどこまで広がるか明確ではない。

宿、蛇蛭遺跡は北上川東岸の砂礫段丘上に立地する。遺跡の北側は沖積低地に面し、やや比高差がある。西側は北上川と直接に接し絶壁になっている。この面は近年に北上川によって著しく浸食されたと推測され、11世紀には西側に、もう少し広がっていたと思われる。北上川の対岸の花巻市側は沖積平野が広がっており、宿、蛇蛭遺跡の載る砂礫段丘面とは比高差がある。また、遺跡の南側と北側は砂礫段丘面がそのまま続き平坦面が広がる。

宿遺跡と蛇蛭遺跡の間には両遺跡を隔てる形に開析された自然の沢が東西に走っている。この状況は鳥海柵が沢によって分断され、隔てられている状況と酷似する。また航空写真、地形図を観察すると、他にも2条の埋没沢の存在が推測される。鳥海柵ほど整っていないが、3条の沢が概ね平行に走っている状態と解される。南2本の沢付近は発掘調査がおよんでおらず、11世紀の遺物、遺構の有無は確認されていないが、鳥海の事例から類推すると、こちら側にも遺跡の範囲が広がり、沢で区切られた複数の空間から構成される居館が成り立つのではないだろうか。

宿遺跡と蛇蛭遺跡を隔てる沢付近から真東約1kmに五大堂光勝寺がある。寺伝では慈覚大師の開基とされており(花巻市仏教会1976)、11世紀、安倍氏の時代にさかのぼる可能性のある寺院である。位置関係から考えて、宿、蛇蛭遺跡の居館と関連が深い寺院である可能性がある。想像をたくましくすれば、光勝寺も居館の構成要素の一つなのかもしれない。

「二郡見聞私記」(南部叢書刊行会編1928)には「五太堂地ぬめり」の記事がある。これは光勝寺の住職智空法印が、稚児を殺した大蛇を退治するため毒蛇降伏の法を修し、苦しんだ大蛇が住処の沼を蹴破って北上川まではって行き、北上川に落ちた後は黒岩まで流され「蛇石」になったという。池から北上川まで大蛇がはった痕跡はくぼみとなって残っており、今は田になっているがこれを「五大堂蛇澤」というと記される。遺跡名の「蛇蛭」はこの「五大堂蛇澤」のことであろう。「蛇澤」は居館を分断する沢を指しているのであろうか。余談にめいてしまうが、北上市黒岩地区でも白山廃寺や黒岩城(北上市教育委員会2002、小野寺2004)で11世紀末頃のかかわらけが出土し、11世紀代の居館や寺院の存在が予測される地域である。そこに五大堂から流れてきた大蛇が固まった「蛇石」が存在するのである。何らかの安倍氏内部(五大堂と黒岩の間の?)の戦いがあり、その記憶が伝説になったのではないだろうか。

4 大釜館遺跡の構造

大釜館遺跡は滝沢村に所在する。滝沢村教育委員会の調査により35,700㎡におよぶ調査がおこなわれている。11世紀中～後葉のかわらけが多数出土しており、安倍氏時代の居館と推測される。この遺跡ではかわらけの集中出土地点に大規模な掘立柱建物が4棟重複しており、11世紀の居館の建物跡検出事例として注目される。この大釜館遺跡は陸奥話記に登場する柵に当てはまりそうなものはなく、宿、蛇蛭蛆遺跡と同様に陸奥話記に登場しない施設である可能性が高い。

遺跡は雫石川北岸の砂礫段丘Ⅱ面に立地する。遺跡の南側、東側、西側は砂礫段丘Ⅲ面が広がり、遺跡内部がやや比高差(約1m)を持って高くなっている。北側は遺跡内と同じ砂礫段丘Ⅱ面が続き平坦な面が広がっている。現在、遺跡は雫石川から約800m離れているが、航空写真では旧河道が多数見出され、11世紀には遺跡と川の距離はもっと近かった可能性も考えられる。

発掘調査では遺跡内を南西から北東方向に直線的に横切って走る自然流路(1号溝)が検出されている。1号溝は上幅の平均値が4.0m、深さの平均値が0.6mで総長は230mに及ぶと推測される。流水の痕跡が認められ、11世紀のかわらけが出土していることから11世紀代にも開口していたと判断される。11世紀の大型掘立柱建物はこの流路の東側に位置する。流路の西側には遺構の分布は薄い、11世紀のかわらけが遺構外から出土していることが報じられ、また流路を挟んで東西での標高差はほとんどなく、地形上の違いは無く、西側も11世紀の居館の範囲と考えられる。これは11世紀の居館内が自然流路で分断されている状況と解される。これは鳥海柵、宿、蛇蛭蛆遺跡と共通の構造といえる。また、自然流路1号溝以外に大釜館遺跡では堀跡が検出されているが、これは中世の城館、大釜館を構成する遺構であり、11世紀に属する人工の堀跡は調査区内では検出されていない。

11世紀の掘立柱建物の約60m北方に7号溝が存在する。この溝からは11世紀のかわらけがまとまって出土しており、11世紀の所産と判断できる。幅1.2m、深さ0.4mで、長さ約40mにわたって検出されている。堀とするには規模が小さいが掘立柱建物と軸方向が似ており、区画の機能を持った溝と推測される。この7号溝は西端で自然流路の1号溝と合流している。

大釜館遺跡の約1500m西方には八幡館山がある。この地点に鉄塔を建てる際に、大釜館遺跡と同様の11世紀代のかわらけが採集され、安倍氏時代の施設の存在が予想されている(室野2003)。昨年度(羽柴2004)はこの八幡館山の裾と雫石川の間を塞ぐ交通遮断施設の存在の可能性を検討している。

5 沼崎遺跡の構造

沼崎遺跡は岩手町に所在する。舌状に西側に突出する段丘の端部が遺跡範囲とされ、その付根を南北に走る堀が走り、孤立した丘が造り出されているという。この地点で工場の建設工事があり、その際に土器の出土が通報され、11世紀のかわらけが多量に採集されたものという。このように発掘調査による出土品ではないが、11世紀のかわらけの量は多く、その形態は鳥海柵、大釜館遺跡のものと酷似し、11世紀の安倍氏時代の居館と推測される。

遺跡は北上川東岸の砂礫段丘上に立地する。南側と西側は北上川の谷底平野に面し急崖となっており、比高差(約20m)がある。北側と東側は砂礫段丘面が連続し平坦面が続く。遺跡範囲は舌状に突出する段丘部分のみと解されているが、同じ平坦面が続く東側への広がりを考えても良いのではないだろうか。この舌状に突出する部分の基部に「堀」があったとされている。この堀の詳細なデータは不明であるが「直線的でかなり深い堀」と記されている。この堀が人工のものか自然の沢地形かは判断のしようがないが、この堀は段丘

の端部を切っているわけで、居館の範囲を囲郭しているわけではないようである。航空写真を観察すると、舌状の基部を切る「堀」の東側に埋没沢と推測される痕跡が「堀」と平行に走っているのが見出せる。これは鳥海柵や宿・蛇蛭蛆遺跡にみられる居館を平行に走る沢目と共通する要素と推測される。

それにしても、この沼崎遺跡で採集されたかわらけの量は非常に多い。これらが発掘調査において出土したものではなく、採集品であることを考慮するとかなりの充実した内容といえる。このことから、沼崎遺跡は安倍氏の居館の中でも重要度の高い拠点的な機能を有していたと考えられる。陸奥話記には貞任の弟の重任が登場するが、重任の字は「北浦六郎」と記される。「北浦」は重任の居館が所在する場所の地名であろうが、これまで明確な比定地は示されていない。沼崎遺跡の所在する地区の地名は「雪浦」である。「北浦」が「雪浦」に転化した可能性があるのではないか。岩手町雪浦は安倍氏が決戦をおこなった厨川柵よりも北方に位置するが、岩手郡内の北上川流域に位置する。十分に安倍氏の勢力圏内であったはずである。

沼崎遺跡は北上川と一方井川の合流点に位置している。この一方井川に沿って北上して行くと七時雨山の南裾に達する。これは鹿角、津軽方面に行くルートと考えられる。この一方井川をさかのぼる途中(岩手町大字一方井字大森)に黄金堂遺跡((財)岩手埋文1985)がある。ここでは鉄磬が表採され古代寺院の存在が推定される遺跡である。近辺のどじの沢遺跡では八稜鏡が出土しており、黄金堂遺跡が11世紀安倍氏の時代に機能していた寺院である可能性を高めている。また沼崎遺跡から、さらに北上川に沿って北上すると奥中山の分水嶺を越え馬淵川流域に至る。このように沼崎遺跡は奥六郡からその外部に出る交通の分岐点に位置している。安倍氏にとっては奥六郡北端の備えの重要な拠点であったはずである。頼時の男子の居館が位置するに相応しい地点と思われる。

6 安倍氏の居館の特長

11世紀、安倍氏の時代に機能していた居館と推測される鳥海柵、宿・蛇蛭蛆遺跡、大釜館遺跡、沼崎遺跡の立地、構造を検討してきた。これらの共通点をまとめる。

- ①大規模な河川に近い平坦な低位の段丘上に立地する。
- ②遺跡の2～3辺は比高差がある崖状になっているが、他の辺は平坦面が広がり、境界が不明瞭である。
- ③遺跡内に開析された沢が平行に数条走り、居館を分断している。
- ④居館の全体の範囲を堀で囲郭するものはない。

7 北方の「囲郭集落」との比較

岩手県北、秋田県北、青森県域、渡島半島には「囲郭集落」、「防御性集落」と称される堀で囲まれる集落が濃密に分布する。その時期は10世紀後半から11世紀に主体を持っており安倍氏の時代とも明らかに重なっている。これは尾根部や標高の高い丘陵を堀と土塁で囲み、その内部に堅穴住居を配する構造である。

その分布は岩手県内にも及んでいるが、二戸郡、九戸郡がその分布の主体で、岩手県郡内にも幾つかの事例があるが、それは北上川流域の平野部ではなく、境界部に近いその北辺の山間部(子飼沢山遺跡、暮坪遺跡など 福島大学考古学研究室2000)に限られる。このようにその分布は基本的には奥六郡の外部であり、分布域はきれいに分かれる。

また、その立地も尾根や標高の高い丘陵が多く、低位の段丘上に立地する安倍氏の居館とは異なっている。何よりも、安倍氏の居館遺跡では周囲を囲む堀、土塁は一例も確認されていない。上記の①～④の安倍氏の居館の特長と囲郭集落の特長では異なる点が多いのである。このように、分布域、立地、構造から安倍氏の

居館と囲郭集落は別系統のものと位置付けるのが妥当である。

今昔物語に「陸奥の国の安倍頼時、胡国に行きて空しく返りたる話(卷第三十一の第十一)」が納められている。これは筑紫に流された安倍宗任が語ったのを聞き継いだものとされる。これによると陸奥の国の奥に「夷」というものがある旨が記されている。そして文章を解すると、安倍氏自身は「夷」と自分たちは全く異なる集団と認識していることが読み取れる。おそらく今昔物語の「夷」こそが囲郭集落を営んだ人々なのであろう。「夷」と安倍氏の自己認識は大きく異なっており、居館の立地、構造にそれが反映されていると考えられる。また陸奥話記にも「奥地の俘囚」、「鉋屋、仁土呂志、宇曾利三都の夷人」に「甘説し官軍をおこさしむ」と記述がある。この「奥地の俘囚・三都の夷人」が今昔物語の「夷」であり、彼らが「囲郭集落」を営んだものと解される。

8 陸奥国南部の事例との比較

陸奥国南部における安倍氏と同時代の居館遺跡を検討する。11世紀のかわらけが出土する遺跡は非常に少ないが、植田前遺跡(宮城県白石市)、中ノ内遺跡(福島県福島市)、宮ノ北遺跡(福島県会津坂下町)の事例をあげる。

①植田前遺跡(宮城県教育委員会1981)・・・11世紀前半代のかわらけが出土している。かわらけは溝から出土している。掘立柱建物は把握されていないが、グリッドを市松模様状に部分的にしか掘っておらず、全面の表土を除去しての遺構検出ではないので、掘立柱建物等が存在した可能性は十分にある。かわらけの出土量から考えて、11世紀代の有力者の居館と推測される。白石川が流れる沖積低地に面する河岸段丘上に立地する。報告書掲載の地形図の等高線をみると、遺跡内を分断する形で南北に開析する沢の存在が読み取れる。

②中ノ内遺跡(福島市教育委員会1988)・・・流路から11世紀後半～12世紀とされるかわらけが出土している。遺跡は下位砂礫段丘の端部に立地し遺跡南端は段丘崖になっている。荒川までの距離は300m程で段丘崖の下は氾濫原が広がる。調査区内には掘立柱建物等は存在しないが、近接地に11～12世紀代の居館が存在すると推測される。検出された自然流路は居館内を分割する沢と解することができる。

③宮ノ北遺跡(会津坂下町教育委員会1994)・・・溝跡から11世紀後半～12世紀初め代のかわらけがまとまって出土している。掘立柱建物も多数(全てが11世紀に属するものではないが)検出されており、11世紀後半～12世紀初頭の居館遺跡と判断できる。遺跡は鶴沼川の氾濫原と比高差約3mの微高地に立地する。鶴沼川までの距離は約120mである。

これら①～③の遺跡の立地は河川に近い微高地や低位の段丘上である。また植田前遺跡は遺跡内を分断する開析された沢が存在しそうである。そしていずれの遺跡も居館を囲む堀や土塁は検出されていない。これは上記の安倍氏の居館の特長と共通する要素が多い。安倍氏の居館と同時代の陸奥国南部の居館は立地、構造が類似していると指摘できそうである。

安倍氏は宮城県南に地盤を持つ平永衡(字伊具十郎)や藤原経清(亘理出身か)と婚姻関係を持っていた。婚姻関係を持つということは、安倍氏と宮城県南の有力者は同じ価値観、自己認識を持っていたと理解できる。これは居館の立地、構造が共通する点にも表れるのは当然である。上述の安倍氏が北方の「夷」を価値観の異なる集団と認識していたのとは対象的である。

9 東国の居館との比較

前九年合戦では源氏方に多くの「坂東の猛士」「坂東の精兵」が加わっている。この東国武士の居館の様相を考えてみたい。しかし陸奥国南部と同様にこれらの調査事例は非常に乏しい。2例を挙げる

①東京都日野市落川遺跡(落川・一の宮遺跡調査団編1999、横浜市歴史博物館1998)・・・4世紀から12世紀まで連続して遺跡が営まれる。11世紀の遺構は、四面に縁を持つ大型の掘立柱建物、井戸、野鍛冶跡、門、柵列が検出され、かわらけや武具、馬具などの鉄製品が出土している。検出遺構と出土遺物から武士、兵の居館と推測されている。多摩川右岸の自然堤防と沖積微高地上に位置する。多摩川までは約400m離れる。周辺とは比高差が乏しく開放的な地形に立地している。居館の全体構造が明らかにはなっていないが、居館全体を囲む堀は存在しない。安倍氏の居館の中では大釜館遺跡の立地に最も類似する。

②横浜市西ノ谷遺跡(横浜市ふるさと歴史財団1997、横浜市歴史博物館1998)・・・10世紀後半～12世紀の鍛冶工房や掘立柱建物が検出され、鉄製の武具や馬具、かわらけが出土し武士、兵の居館に関連する遺跡と推測されている。多摩丘陵東側の下末吉台地の端部から裾面に立地する。鶴見川支流の早淵川流域の沖積低地に面している。遺跡の立地する台地の裾面は流水によって開析された支谷が多数存在する。西ノ谷もその遺跡名のとおり、支谷の裾を削り、その土で谷の端部を埋め立てて平地を造り、鍛冶工房、掘立柱建物が建てられている。沖積低地の面する段丘に開析された沢が走る状況は鳥海柵などと共通する要素といえる。

両遺跡ともに居館の全体像が明らかになっているわけではないが、安倍氏の居館の特長と大きく異なる点はない。また、立地は安倍氏の居館と概ね共通している。結論を出すには事例が乏しい状況であるが、安倍氏の居館と同時代の東国の居館は類似する要素が多いと考える。

10 清原氏の居館と安倍氏の居館の比較

安倍氏滅亡後、奥六郡の支配は清原氏の手に移行する。そして「後三年の役」を経て、12世紀初めには奥州藤原氏が奥六郡の支配者になる。そのキーパーソンは藤原清衡である。清衡は安倍氏、清原氏両方の系譜を引いた人物である。よって、安倍氏から平泉までの移行は価値観、文化的背景は断絶がない一連の流れと捉えられる。それは居館についてもあてはまるのか検討する。まずは清原期の居館を考えたい。

岩手県内において清原期(11世紀第4四半期頃)の居館の内容は全く不明といってよい状態である。かわらけの編年上では北上市黒岩の白山廃寺出土資料が当てはめられるが、遺跡の内容ははっきりしていない。

平泉に移る前の清衡は江刺の「豊田館」に居館を構えていたとされている。江刺市下苗代沢の豊田城遺跡は清衡の「豊田館」に比定される遺跡である。しかしながら、これまで明確な遺物、遺構は検出されていない(江刺市教育委員会1997など)。豊田城遺跡は沖積平野を望む低位段丘上に立地する。ここでは、豊田城の範囲を、登録範囲よりもさらに北に広がるものとして記述する。西側と南側、北側は沖積平野に面し急崖になっている。東側は遺跡の載る低位段丘面が概ね平坦なまま丘陵の裾まで続く。そして低位段丘を開析する沢が3条、概ね平行に走っている。西側の沖積低地には遺跡から約800m離れて人首川が流れている。このロケーションは鳥海柵を彷彿とさせるものである。このように豊田城遺跡の立地は安倍氏の居館の特長と全く合致するものである。安倍氏の血筋を引く清衡が居館を構えるに然るべき条件を満たしているのである。遺構、遺物が検出されていない点は、発掘調査面積の狭さによるもので豊田城遺跡が「豊田館」である可能性は非常に高いと考える。

大鳥井山遺跡(横手市教育委員会1978～1982)は秋田県横手市に所在する。陸奥話記に安倍正任が「出羽の清原光頼の子大鳥山大郎頼遠」のもとに身を隠した旨が記されており、大鳥井山遺跡が清原頼遠の居館と推

測されている。横手川東岸の独立丘陵に立地し、南側は急傾斜の大鳥井山と北側にやや平坦な子吉山の2つの丘陵からなっている。2つの丘陵の境界には自然流路が存在し丘陵を明確に分けている。そして大鳥井山と子吉山の東面には(西側は横手川の氾濫原に面し急崖になっている)二重の堀、土塁が巡っている。

この遺跡は地形と二重堀の存在が、柳之御所遺跡と類似することが指摘され、清原氏の数少ない居館の調査事例として取り上げられることが多い。報告書をみると、11世紀代の可能性が高い土器も掲載されており、11世紀清原氏に関連する遺跡の可能性はかなり高い。しかし中世の中国産白磁、青磁の出土も報じられており(大鳥井山Ⅱ47頁)、また子吉山の東辺を巡る堀SC2の埋土中(最底面から58cm上)から中国産53枚が鏝の状態出土している。その中の最新銭は「慶元通寶(初鑄年1195年)」で、確実に11世紀清原氏より後の遺物である。また子吉山と大鳥井山を境する自然流路に沿う堀?SD14の埋土下部からは内面が赤漆の漆器碗が出土している(大鳥井山Ⅲ22頁)。これらの点から大鳥井山遺跡は中世城館との複合遺跡であるのはほぼ疑いようがない。よって、堀、土塁の帰属年代は11世紀ではなく、むしろ中世城館に伴う可能性が高いと筆者は考えるのである。11世紀清原氏の居館としての大鳥井山遺跡を語る際には遺構の帰属年代を吟味する必要がある。しかし、報告書の記載のみからそれを行なうのは困難で、ここでは大鳥山遺跡についてのこれ以上の言及は避けておく。

11 平泉と安倍氏の居館の比較

豊田城遺跡の立地は安倍氏の居館遺跡と共通するものであった。それでは、次の段階の平泉は安倍氏の居館の系譜を引いているのであろうか。

平泉内において、12世紀初頭の遺物がまとまって出土しているのは、柳之御所遺跡堀内部地区、堀外部地区、中尊寺境内である。初期の平泉はこの範囲が中枢であったと考えられる。これまで筆者は柳之御所遺跡の堀が掘られた時期は平泉の最初期段階で、堀で囲まれた柳之御所遺跡の範囲が清衡の居館と考えてきた(羽柴2002)。しかし、今回取り上げたの安倍氏の居館遺跡で堀を巡らすものは存在せず、柳之御所遺跡と安倍氏の居館との系譜を見出すことに頓挫しそうであった。そこで、視点を柳之御所遺跡のみから、平泉全体に広げて考えてみた。

平泉は低位段丘に立地し南側、東側は沖積低地に面しその境界は崖になっている。そして「猫間が淵」、「鈴沢の池」という開析された沢が2条概ね平行に走り、低位段丘面を分断しているのである。この地形条件は鳥海柵と非常に類似している。鳥海柵の範囲は約500m四方、平泉は1km四方で、その広がりには約2倍という違いはあるが、上述した安倍氏の居館の特長①～④の要件は全て満たしているのである。柳之御所遺跡に拘泥せず、平泉全体の立地をみると、それは安倍氏の居館の立地と全く共通するのである。平泉の地形は安倍氏の系譜を引く清衡が選択するに相応しい条件を満たしているのである。

しかしながら大きな問題が一つ残る。それは上で答えを曖昧にした柳之御所遺跡を囲む堀の問題である。柳之御所遺跡の堀は二重堀で、その埋土中に12世紀後半の遺物を大量に含み、12世紀後半には堀としての機能が失われていたことを物語っている。よって堀が掘られたのは12世紀前半代と判断できる。これまで筆者は堀が柳之御所遺跡を「囲む」と記してきたが、実際には堀は最南端で「く」の字に東側へ曲がったあとに(現在の県道付近で)途切れているのである。そして堀の西辺(猫間が淵側)の北端部分も発掘調査が及んでおらず堀の行方が明らかになっていない。さらに柳之御所遺跡の北側は北上川の浸食により失われており、それに対応する堀の状況は失われてしまっている。これまで安易に柳之御所遺跡は堀で「囲まれる」と記してきたが、それが妥当なのか疑問も生じてきたのである。

現在、柳之御所遺跡の堀の系譜については明確な考えを見出せないでいる。大きな課題を残すことになるが、これからの検討課題としたい。

12 まとめ

居館としての安倍氏の柵を検討してきた。具体的な内部施設の検討にまで立ち入ることができなかったが立地条件と大まかな構造について見通しを立てた。それは「①大規模な河川に近い平坦な低位の段丘上に立地する。②遺跡の2～3辺は比高差がある崖状になっているが、他の辺は平坦面が広がり、境界が不明瞭である。③遺跡内に開析された沢が平行に数条走り、居館を分断している。④居館の全体の範囲を堀で囲郭するものはない。」である。

そして、安倍氏の居館の特徴を他地域の遺跡との比較した。その結果、安倍氏の居館は陸奥国南部、東国の居館と類似し、近接する北部の「囲郭集落」とは特徴が異なることを指摘できた。これは安倍氏の出自、自己認識が表れているのではないか。つまり、安倍氏は東国や陸奥南部の「兵」「武士」と類似する出自であり、自己認識を持っていたと考えたいのである。

また、12世紀平泉の構造と安倍氏の柵の関係についての考察は、立地が類似する指摘だけに留まり、柳之御所遺跡の堀の系譜について明確な見解を示せなかった。来年度の課題としたい。

註・引用文献

- 註1 本稿で用いた「陸奥話記」は板橋源氏の読み下し文を用いた。参照文献は盛岡ひ・ストーリー編1991「陸奥話記—前九年の役—板橋源先生の講義より」である。
- 註2 終末期古墳群を調査した金ヶ崎バイパス関連の調査((財)岩手県埋文1981)でも11世紀のかわらけが出土している。報告書にはその旨の記述がないが、出土遺物を実見したところ鳥海A遺跡などと同じタイプのかかわり(報告書第35図1など)が出土している。
- 会津坂下町教育委員会1994「阿賀川地区遺跡発掘調査報告書 宮ノ北遺跡(第2次調査)」会津坂下町文化財調査報告書第42集
- 岩手県教育委員会1981「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X 西根遺跡 鳥海B遺跡 鳥海A遺跡」岩手県文化財調査報告書第59集
- 江刺市教育委員会1997「平成8年市内遺跡発掘調査報告書(三百刈田遺跡・豊田城遺跡)」江刺市埋蔵文化財調査報告書第16集
- 大平聡1994「堀の系譜」『城と橋を掘る・読む』山川出版社
- 小野寺麻耶2004「北上市における古代末期の土器様相」『北上市立埋蔵文化財センター紀要第3号』
- 落川・一の宮遺跡調査団編1999「落川・一の宮遺跡I」
- 北上市教育委員会2002「黒岩城跡」北上市埋蔵文化財調査報告書第53集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター1981「金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書I 西根遺跡」岩手県埋文センター文化財調査報告書第18集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター1985「黄金堂遺跡発掘調査報告書」岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第86集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2005「平成16年度発掘調査報告書」岩手県埋文センター文化財発掘調査報告書第469集
- 高橋昭治・八木光則1994「岩手町出土の古代末期の土器」『岩手考古学第6号』岩手考古学会
- 滝沢村埋蔵文化財センター2003「大釜館遺跡発掘調査報告書」滝沢村埋蔵文化財センター報告書第1集
- 南部叢書刊行会編1928「南部叢書第九冊」「二郡見聞私記」(和田甚五兵衛氏武原著 天保6年)
- 羽柴直人2002「平泉の道路と都市構造の変遷」『平泉の世界』高志書院
- 羽柴直人2004「安倍氏の柵の構造—交通遮断施設の視点から—」『平泉文化研究年報第4号』岩手県教育委員会
- 花巻市仏教会監修1976「寺院をたづねて(歴史とその周辺)」(関北日本企画)

福島大学行政社会学部考古学研究室「西根町子飼沢山遺跡、暮坪遺跡発掘調査概報Ⅱ」『岩手考古学第12号』岩手考古学会

福島市教育委員会1988「一般国道13号福島西道路関連遺跡発掘調査報告書 中ノ内遺跡」福島市埋蔵文化財報告書第27集

宮城県教育委員会1981「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ（1）植田前遺跡」宮城県文化財報告書第81集

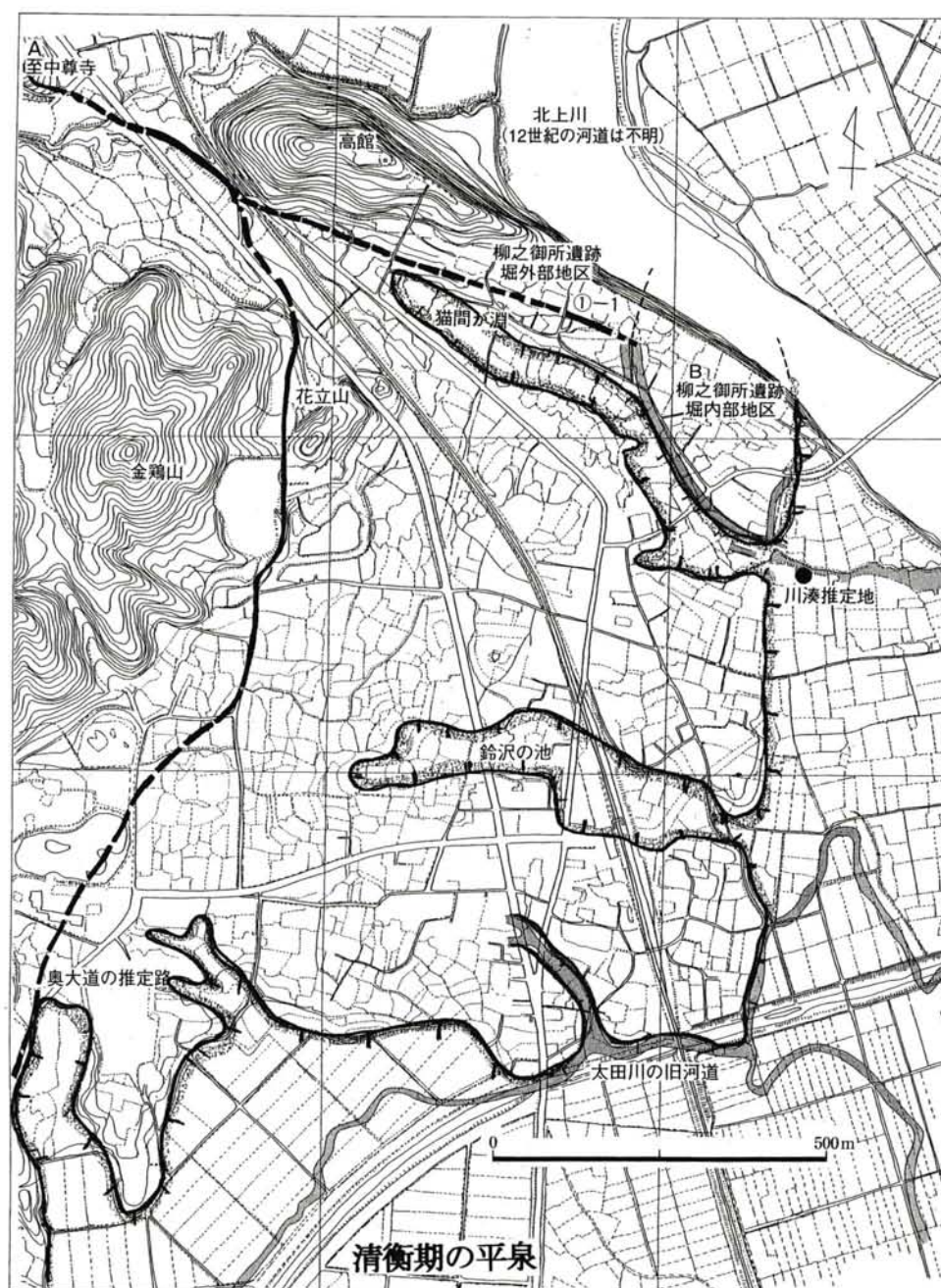
室野秀文2003「大釜館の縄張りについて」『大釜館遺跡発掘調査報告書』所収

八木光則1989「安倍、清原氏の城柵遺跡」『岩手考古学1号』岩手考古学会

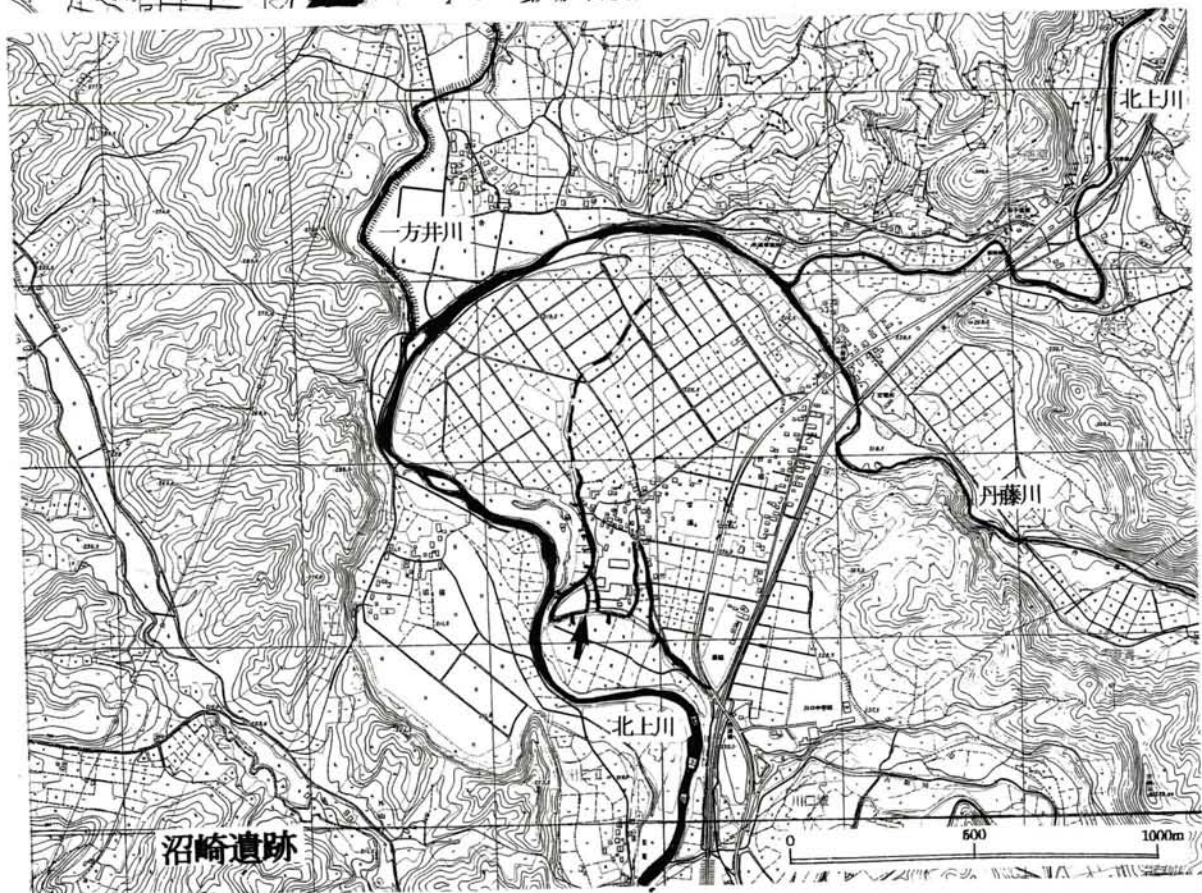
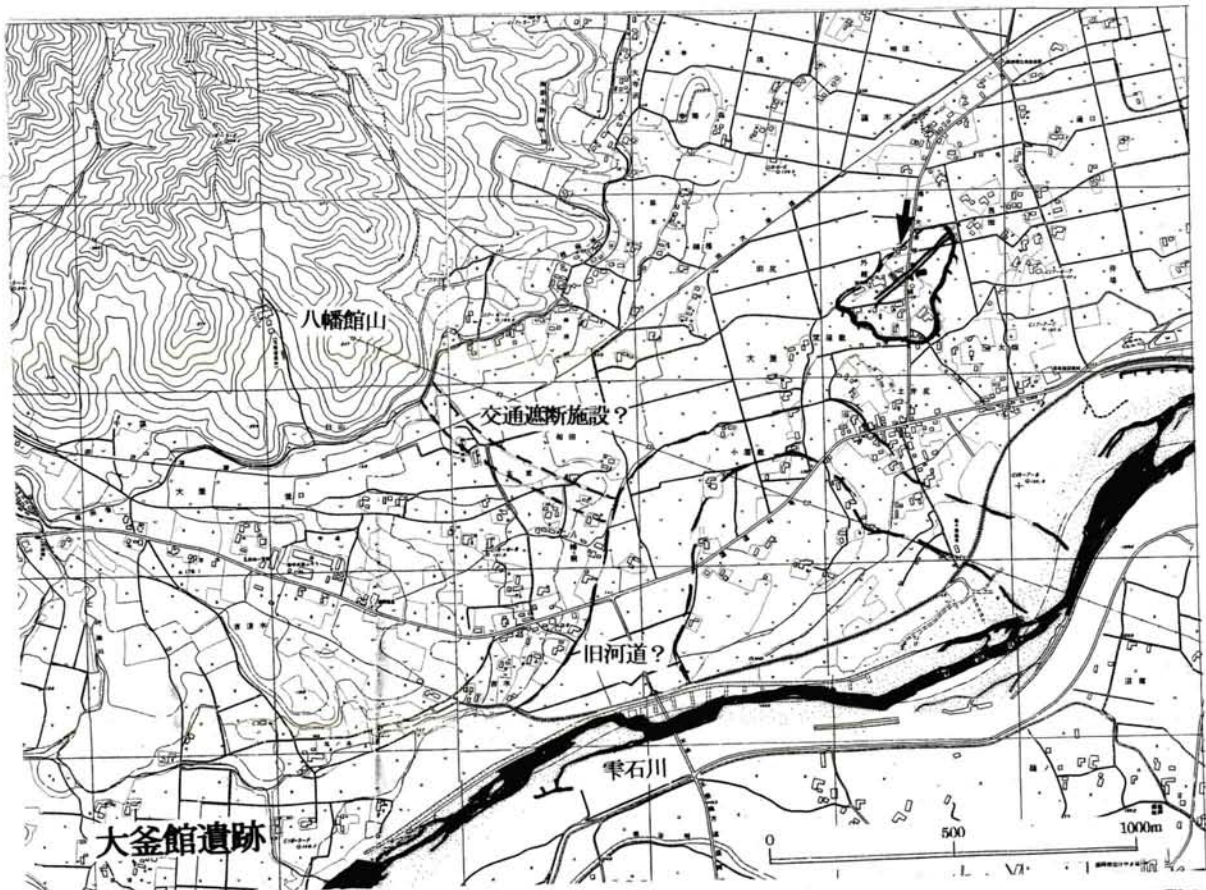
横手市教育委員会1978～1982「大鳥井山Ⅰ～Ⅴ」横手市大鳥井山遺跡発掘調査概報

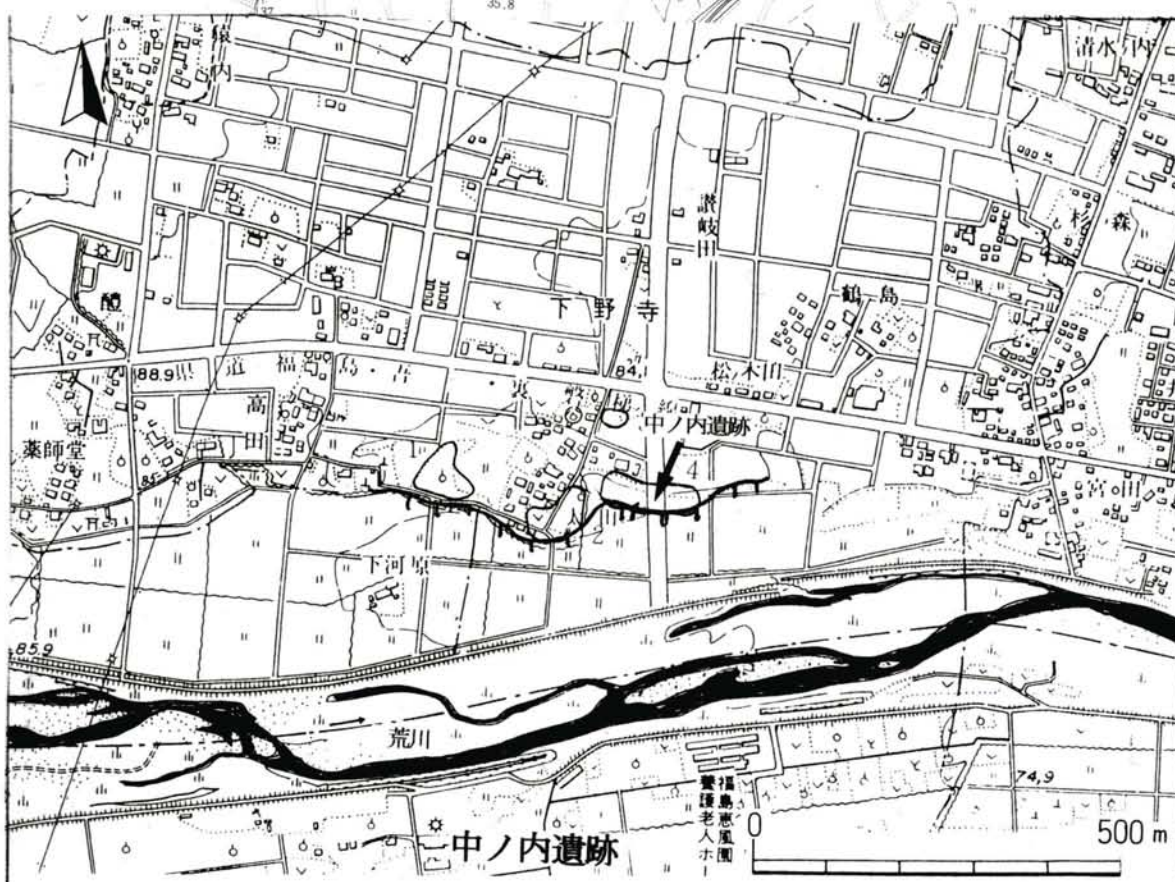
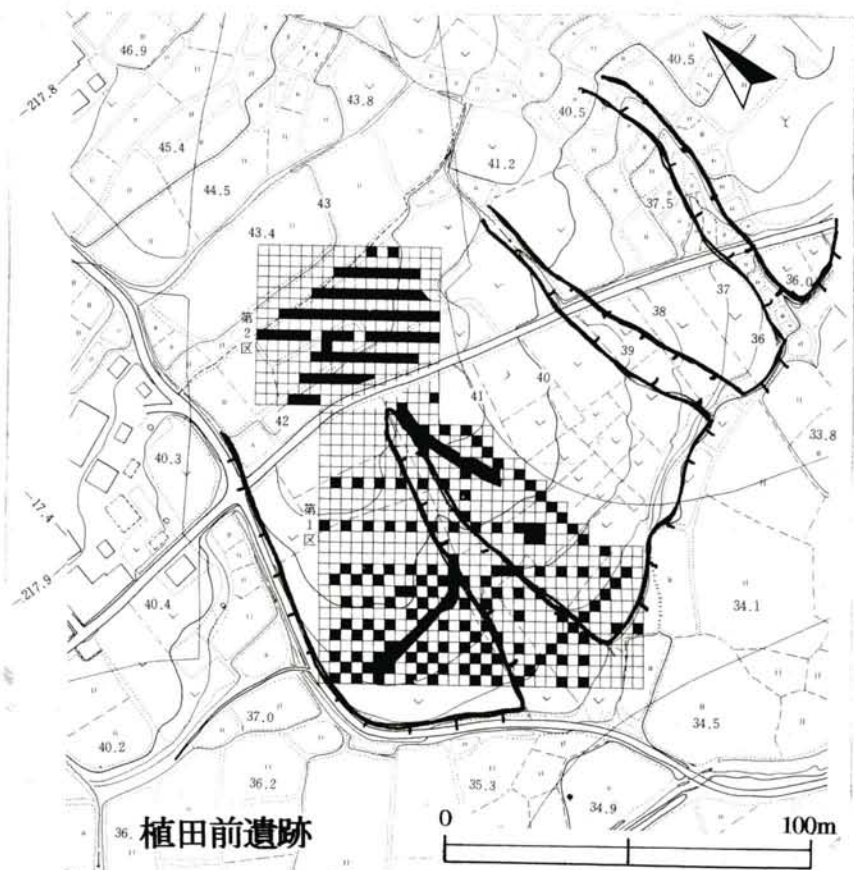
横浜市歴史ふるさと財団1997「西ノ谷遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告23

横浜市歴史博物館1998「兵の時代 古代末期の東国社会」









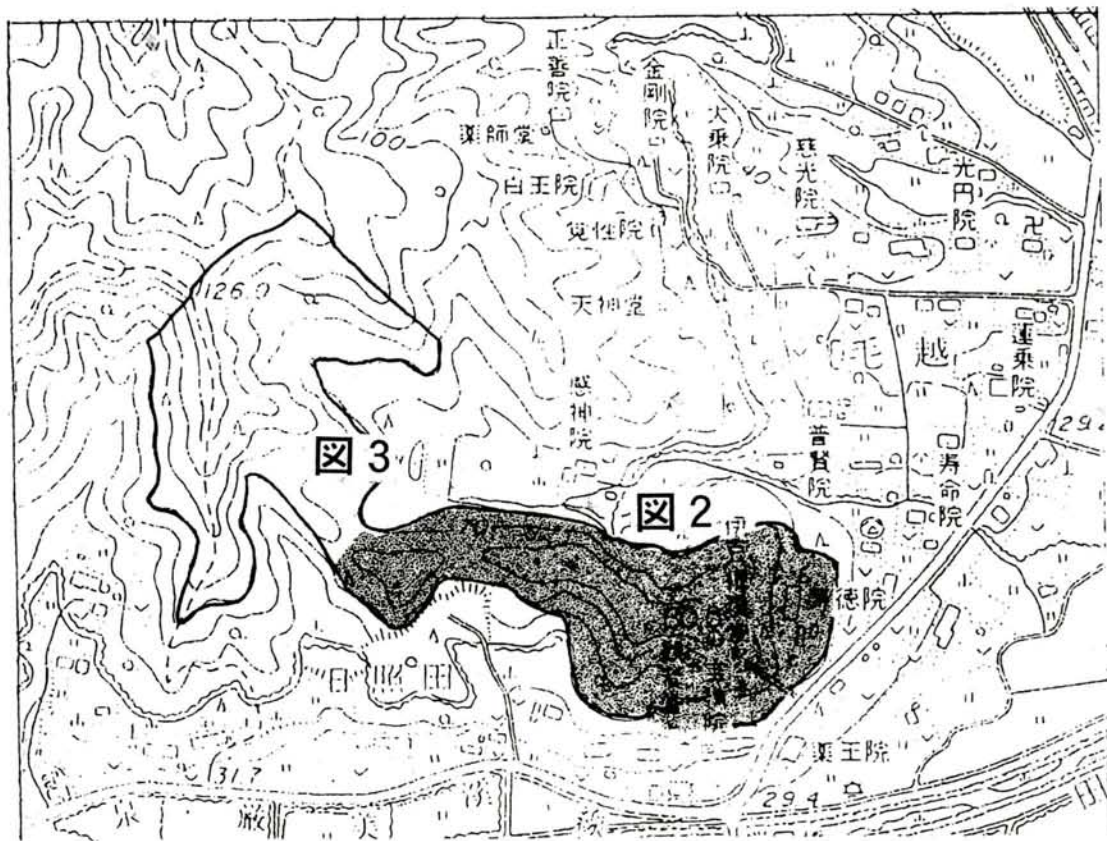
中世都市周縁部の歴史を探る－毛越地区の踏査から－その2

岡 陽 一 郎

はじめに

今年度は昨年度の調査区に隣接する鏡山の北側斜面と、その奥に位置する感神院西側一帯において現地踏査を行った【図1】。

前回も述べたとおり、当該地域一帯に関連した文献資料はきわめて少なく、加えて平泉の中心部で威力を発揮した発掘調査も、この場所では調査数自身が多くはないなど、文献・考古学的アプローチには少なからぬ制約がある(1)。そのため今回も前年度と同様、地表面観察の成果を他の資料から得た情報と付け合わせる手法を採用した。なお、その際に作成した踏査図については、歩測を伴う簡易計測を基本としたため、図はあくまでも概念図的なものということを付け加えておく。



【図1】太線内が前年度踏査区、網掛け部はその際に図化した範囲。
キャプション部周辺を今回は踏査した。

1 鏡山北側斜面

鏡山北側の山裾部には、南北に長い二つの平場がある【図2】。いずれも形状は不整形で、削平もあまりよくない。平場群の北半分は水路に、そして南半分は感神院方面へと向かう現行の道路にそれぞれ接し、前者は水路に沿ってごく最近の崖崩れの跡が残り、後者については道路と接する部分をほぼ垂直に切り落とす格

好で、コンクリート製の護岸が設けられているため、両者は本来もう少し東に張り出していたのであろう。また、平場2-2は図中に「踏査中」とある部分の南で、寿徳院境内へと通じる、ごく最近出来たと思しき道路で分断されてしまっている。

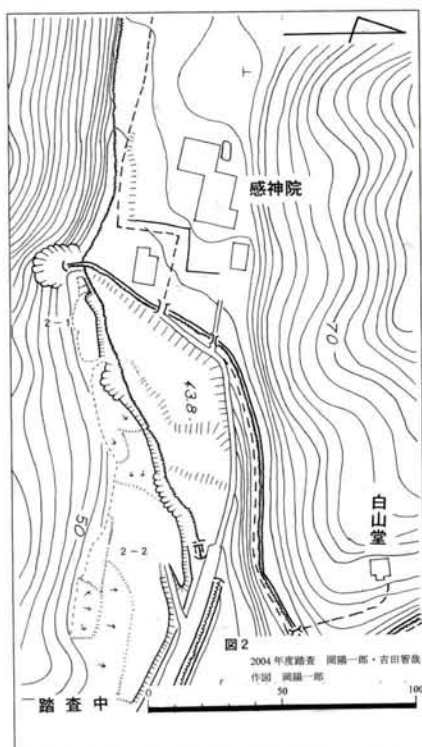
この平場群は緩斜面にあって所々には凹凸もあるなど、現状では建物が建てられていたとは考えにくい。けれども平場2-2への取り付け道路が存在することから、最近まで何らかの形の利用があったことは確実である。現時点では耕作や植林などによる利用の可能性をあげておく。

また、2-1の北には鏡山を掘りぬいて作られた用水路の水門があるが、この周囲は最近の工事により、踏査図の原図とした都市計画図と現地形との間では差が生じてしまっている。今日の平泉では各地で様々な工事が行われているが、その過程で景観が変貌を遂げたとしても、これらは身の回りで繰り返される日常の光景であり、むしろ当たり前であるがゆえに、人々の注意をひくことも、そして記録に残されることもない。その結果として数十年後に振り返ってみたとき、かつての景観を偲ぶことは難しくなると予想される。過去の人間による営みの所産を遺跡というのなら、これら破壊された光景もその誕生時期や性格は不明ではあれ、立派な遺跡のはずである。史跡指定の有無や景観の歴史的価値という枠を越え、現時点での土地の様子を何らかの形で記録しておくことは、我々の子孫たちのためにも必要であろう。ちょうど『安永風土記』に代表される近世の人々の手になる資料が、近世のみならず、古代・中世の平泉を知る手懸かりになっているように。

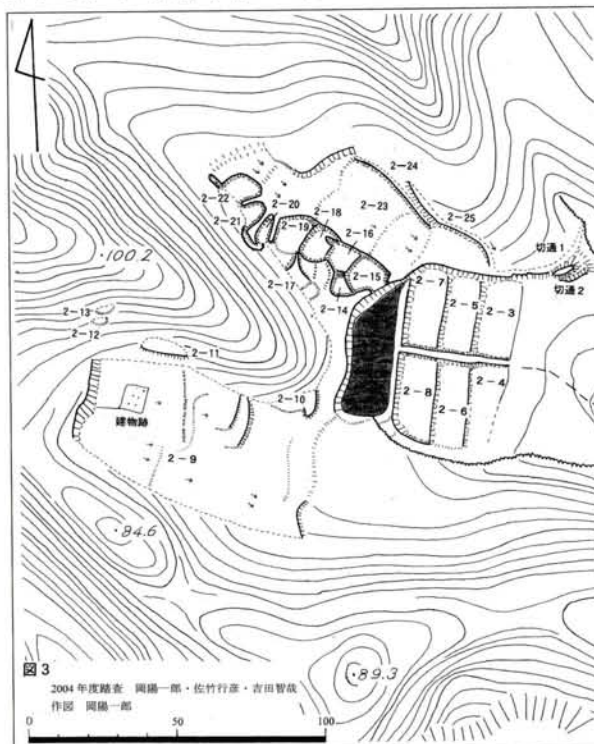
2 感神院西部

次は感神院のある谷についてである。この谷は最奥部で二つに分かれ、そのいずれでも人為的な地形改変の痕跡を確認することができた【図3】。なお、この支谷については説明の都合上、これ以降は便宜的にそれぞれ北谷・南谷と仮称することにする。

まず南谷であるが、ここで目をひくのは谷のほぼ全面に広がる、2-9という巨大な平場である。当該平場は緩斜面を含み、所々には低い段差も認められるけれど、平場最西端には自然斜面を切った痕跡が急斜面



【図2】



【図3】

として残っているために、人為的なものと判断してみた。平場のほぼ全面に規則正しく杉が植林されているので、最終的な土地利用としては造林が行われていたことがわかる。なお、平場の東部分は自然の段差を経て、自然地形へと転じている。この平場の奥には建物の礎石と、その周囲を取り囲む浅い溝が残っていて、礎石配置からは1間×3間の細長い建物を復元することができる。その規模から推して恒久的な住居ではなく、むしろ臨時的に設けられた、小屋のような建物を想定すべきであろう。建物の建っていた年代については、付近にコンクリート製の小さな祠の屋根らしきものが転がっていることから、近現代の所産と考えておく。

さて、南谷の北側斜面には4つの削平地が存在する。このうちの2-10・11は比較的形が明瞭なのに比べ、2-12・13はそうではない。そして後者には複数の近世の墓碑が半ば埋没した格好で残されている。

平場2-9の東北の部分は帯状の平坦地となって北谷と結ばれているが、北谷は南谷と違って谷底に当たる部分に、窪地のような小型の平場が連続しているなど、隣り合う2つの谷では土地利用に差があったようである。この平場群では現在でも水が地表に溜まっていて、加えて平場2-22に集まった沢水は、平場22→21→20→19→18→16→15という順路で流れるようになっている。以上のことから、これら一群の平場は谷を堰き止める格好で造成された水田跡と判断した。平場2-21と22の間で水路が迂回しているのは、水温の低い沢水を利用するに当たり、迂回させることで水路の距離を伸ばし、少しでも水温を高めようとした結果であろう。

これらの平場群の北には一段高い格好で、平場2-23～25が位置している。平場2-23の北西の境界（平場2-22の北側）ははっきりとせず、平場全体も比較的平坦な東南の一面を除き、緩斜面の軀をなしている。けれども平場の北には斜面を切った痕跡が残っていることから、造成を受けたと判断して平場に入れることにした。ここは全面に規則正しく杉が植林されている。また、当該平場の東端は通路のようになって東の谷へと続く。その途中にある切通1は、谷へと降りるために丘陵斜面を切断したものであろう。その南にもう一条、切通2が存在するが、これについては平場2-3～8のある平坦地から、谷に降りる目的で作られたものと推測する。こちらは切通1よりも荒廃していることから、切通1より早い段階で利用されなくなったと考えている。

平場2-23の山腹よりには帯状の平場2-24・25が併走している。その形状などからみて、これらは通路の痕跡とするのが妥当であろう。特に後者はスロープによって2-23と接続していることから、その可能性は高い。

以上の遺構群より一段低い場所には、ちょうど北谷と南谷の入り口を塞ぐような形で用水池がある。これより低い位置にある2-3～8は、池から用水の供給を仰ぐ水田跡であり、ごく最近まで稲作が行われていたようである。

3-A 土地利用を考える～植林・水田

では、これまでの踏査成果を踏まえて、この周辺の土地利用のあり方を考えてみよう。まずは北谷と南谷の遺構群についてであるが、戦後の一時期、谷の奥には穂積さんという方がいたという話を、感神院さんからうかがった。この付近で明らかな建物遺構はというと、南谷の礎石建物跡しかないから、これが相当するとみられる。そして建物の廃絶時期は戦後のある時点ということになる。さらにこの建物跡は植林された杉によって礎石の並びにズレが生じていて、現状のままでは木の配置に引っかからないように建物を建てるのは難しいことから、建物が廃絶した後で植林が行われたという流れが推測できる。しかし、建物以前の土地

利用のあり方については、地表面観察でははっきりしない。

また、北谷でも平場の内部や、平場の境には杉が植えられている。水田跡についてもやはり畦には杉が植林されていることから、水田の廃絶後に植林が行われたことがわかる。ただし、杉の生育状況から判断すると、こちらの方が植林時期は遅かったのではなかろうか。

現状では感神院方面からこれらの場所に行こうとすると、用水池が邪魔となる。感神院さんによるとこの池は明治20年代に造られたということであるから、ここから用水の供給を仰ぐ平場群については、当然これ以後に誕生したということになる。では、貯水池誕生以前の光景はというと、南谷のような緩斜面か、北谷のような小規模な水田群のいずれかが存在していた可能性を指摘しておく。

3-B 土地利用を考える～忘れられた墓地

先にも触れたとおり、2-12・13には自然石に手を加えた墓碑が複数残されており、ここが過去のある時期に墓地であったことがわかる。藪に覆われ、斜面上からの土砂の流入により墓石も埋没しかかっているなど、現在では忘れられた存在となっていることが容易に見て取れるが、これは感神院裏手にある同院の墓地が今でもきちんと供養されていることと対照的である。

感神院さんによれば南谷の墓地は同院移転前からあったということで、感神院が供養はしていたが、今から20年ほど前に供養が大変だという理由から、ここから6基の墓石を感神院裏手にある現行の墓地に合祀したのだという。感神院の移転は享和4年(1804)の出来事であるから(2)、南谷で発見した宝暦6年(1756)や、安永9(1780)年の紀年銘を持つ墓石などについては、感神院とは本来無関係な存在ということになる。



【写真1】

ことになる。

余談となるが感神院本来の墓地はここではなく、移転以前の所在地である祇園地区にあった。そして近年になってここから今の場所に墓石を移したというから、移転以前にいた土地との結びつきは、ごく最近まで残っていたといえよう。

では南谷にあった墓地の被葬者は一体誰なのか。これを解く鍵は墓碑の一つにあった【写真1】。この墓石は紀年銘こそ持たないが、「(梵字) 権大僧都然眞」というように人名が刻まれている。そして彼は『安永風土記』の「医王山毛越寺」の項に、慈光院の6世として登場するのであった(3)。『安永風土記』によると彼の没年は享保10年(1725)なので、先にあげた記念銘を持つ墓碑よりは世代的に先行することになる。

実はこの慈光院こそ、先にあげた穂積さんの家に当たるのであった。さらに同院の穂積昭慈氏による「(前略) 昔は私の所有する近隣の山林に邸宅があり、通称最明寺入り、と言ってい

るが、「義経が自刃する時一子（四歳の娘）を殺して最明寺に埋葬した」（『平泉名勝誌』）とあるから（後略）」（4）という証言があることは見逃せない。毛越寺の子院群が毛越地区に集中移転したのは享和4年（1804）のことで（5）、慈光院はこれ以前から毛越にあったとされる子院なのである。同院は現在別の場所にあるとはいえ、墓碑の存在から判断するに、かつてはここと関係した邸宅が南谷周辺にあったということになる。そして毛越への子院の移動については、単に他所から子院が移転してきただけに止まらず、受け入れ先の毛越にあっては既存の子院の移転や整理をも伴う、大規模なものであった可能性が生じる。

これらを前提にして再度現在の南谷の地形を眺めると、ここが広大な平場2-9によって占められている原因として、享和4年以前に谷全面が慈光院関連の屋敷地であった可能性が出てくる。そうすると平場2-12・13についても、子院に付属する墓地という、今でも毛越でみられる光景の一つとして捉えることができる。当該事例や先述した感神院と祇園地区との結びつきの話からは、子院群の大移転を挟んでも、各子院は移転前の土地と何らかの関係を維持していたことがうかがえる。特に墓地については、先祖代々の墓所ということもあって、新天地に移転後も容易に関係が切れなかったのではなかろうか。言い換えると近世に移転があったにせよ、この地区の人々の精神には中世以来の意識が生き続けていたといえる。これは寿徳院境内にあって「ゴンゲンサマノゴリンミズ」と呼ばれ、一種の信仰対象となっていた、五輪塔の笠の部分にまつわる話と期を一にするものでもある（6）。

4 サイミョウジ

先の穂積氏の証言には、もう一つ重要な箇所がある。それは「最明寺入り」という通称地名であって、墓碑の存在や地形などの点からいって、これは南谷一体を指す地名とするのが妥当な解釈である。「最明寺入り」と慈光院との関係は不明にせよ、江戸時代に作られた『仙台領 奥州街道絵図』（7）には、鏡山の東に「西明寺屋敷」という記載がある【写真2】。「最」と「西」の字こそ違え、「サイミョウジ」という地名自体、少なくとも近世段階までは確実に遡る点を確認しておく。それゆえ『安永風土記』の「平泉村」にある「一、西明寺 往古平ノ時頼入道順国ノ時休所相立申所ト申伝、今ニ蹟有之候」という記述は（8）、当地を指すと判断する。



【写真2】「西明寺屋敷」『仙台領 奥州街道絵図』（註7参照）に一部加筆

そうしたときに極めて重要な意味を持つのは、「平ノ時頼入道」の記述である。これは鎌倉幕府の有力者であった北条時頼のことを指し、実際に彼は「最明寺殿」とも呼ばれていたものであった。また、彼は身をやつして各地を訪れるといった、廻国伝説の主人公としても知られているが、やはり平泉にも同様の伝説が生きていたことは見逃せない。時

頼朝伝説は全国に広汎に分布するとはいえ、特に東北地方はその分布密度が高く、宮城県松島町にある瑞巖寺の前身の松島寺や、山形県山形市の立石寺、あるいは青森県藤崎町の満蔵寺などに伝わる伝説は特に有名である。廻国伝説それ自体の実否については、すでに明治・大正期に遡る長い研究史があるけれど、近年では時頼自身の廻国の実否よりも、むしろ伝説が残されたその土地自体に着目した研究が行われている。例えば入間田宣夫氏(9)や馬淵和雄氏(10)は、当該伝説の核には時頼本人というよりも、舞台となった土地への幕府勢力―実際には北条氏勢力―の伸展の記憶が据えられていることや、しばしば在地の有力寺院が、関東祈祷寺という一種の幕府出先機関となっている点を指摘している。両氏の指摘によると時頼の来訪伝承は、舞台となった土地への北条氏勢力進出の歴史を象徴するものなのであった。筆者もこれに関連して、北条氏の地方進出は政治や交通・物流上の要地を求めて行われ、関東祈祷寺化などにより地方の信仰の中心を押さえることは、近隣住民のココロを支配する側面もあったと指摘したことがある(11)。

これに加えて「サイミョウジ」という寺院のある場所は、かつて北条氏所領が存在したり、廻国伝説があったりすることが多いという指摘もある(12)。と、なれば、ここ平泉の「サイミョウジ」と、そこに残る廻国伝説についても、鎌倉幕府―ひいては北条氏―の進出という文脈の中で捉える必要がある。少なくとも鎌倉時代の平泉については以下にあげるように、彼らがここに食指を動かすだけの価値を十分に持っていたのであるから。

鎌倉軍の侵攻の前に平泉館は焼亡し、藤原氏も滅亡したとはいえ、中尊寺や毛越寺を始めとする寺社群や町場群はほぼ無傷で残っていたと推測されている。そして源頼朝が一種の占領軍総司令官として、葛西清重を平泉に置いたことなども(13)、これらの遺産を積極的に活用しようとした結果であろう。それゆえ鎌倉政権下における都市平泉は徐々に衰退し始めていたとはいえ、依然として奥州における拠点の一つとして機能し続けていたと考えるべきである。その上、中尊寺や毛越寺などの平泉の寺院については、先述した関東祈祷寺であったという指摘もある(14)。鎌倉幕府がこれらを支配するために、惣別当職という役職を設けたのは、とりもなおさず東北地方における宗教の一大拠点としての平泉の重要性を示すことに他ならない。同時に遠藤巖氏がすでに明らかにしているように、6代目以降の惣別当には出自不明の11代目を除き、すべて北条一族出身者が任命されていた(15)。実際に北条氏は平泉に影響力を浸透させていたのである。

これらを前提にすると毛越地区の「サイミョウジ」については、他の「サイミョウジ」の多くがそうであったように、幕府や北条氏の平泉への勢力浸透と何らかの関係を有する地名とすべきである。同名の寺院が存在した可能性についても、積極的に認めるべきであろう。すると今度は、そういった施設が平泉中心部ではなく、どうして毛越地区に置かれたのかという新たな疑問が生まれるが、これについては以下のような理由を推理しておく。まず一つめとして毛越は平泉の出入り口の一つであり、ここを走って達谷窟方面へと向かう現行の県道平泉・巖美溪線は、平泉攻撃後の源頼朝も通ったように(16)、鎌倉へと向かう道路として古い歴史を持っていたことがある。それゆえ毛越を押さえることは、鎌倉から平泉へと通ずる道路の出入り口の一つを扼することにもなるのである。ちょうど鎌倉でも、その出入り口付近に北条一族の邸宅が置かれていたことなどは(17)、興味深い相似点といえよう。二つめとしては、鎌倉時代になっても平泉中心部には旧来の権利関係が生きており、新たな施設を建てるには十分な土地が確保できなかった可能性を指摘しておく。藤原氏滅亡後も存続し続けた中尊寺や毛越寺などが、本来藤原氏と深い関係にあった点を考慮すると、鎌倉時代になったとはいえ藤原氏に繋がる歴史や記憶、そして諸権益が平泉からおいそれと消滅したとも思えず、こういったものが色濃く残っていた平泉中心部には、北条氏としてもそうやすやすと入り込むことができなかったのかもしれない。

いずれにせよこの謎を解明するには、いかんせん平泉だけでは材料不足である。むしろこの問題は各地の「サイミョウジ」の事例を収集し、その土地の中で「サイミョウジ」がどのような立場にあったのかを検討する

作業を経て、初めて解き明かせるべき性質のものなのであろう。

おわりに

今回の調査では現地踏査と近世資料、そして伝承とを一つにすることで、感神院周辺における過去の様子を素描してみた。その過程では近世資料と金石文、それに伝承とを一つに集約することができたが、これには毛越と同様に同時代資料が乏しい地域において、過去の歴史を解明する際の参考になることであろう。

もとよりこの手法とて、まだまだ謎が多い平泉周縁部の過去の歴史を読み解く際の普遍的な方法とはいえない。調査の対象となる場所にどのような資料が残っていて、それをどのように組み合わせれば過去を知るためには効果的なのか。今後の平泉研究のためにも、踏査を続ける中で方法論を鍛え上げていかなければならない。

註

- 1 岡陽一郎 2004「中世都市周縁部の歴史を探る－毛越地区の踏査から－その1」『平泉文化研究年報』4。
- 2 前掲柱1参照。
- 3 『平泉町史』資料編二、9－2。
- 4 穂積昭慈 1986「義経と平泉」『別冊 歴史読本 特集源義経のすべて』新人物往来社。
- 5 前掲柱1参照。
- 6 前掲柱1参照。
- 7 『平泉町史』資料編二。
- 8 『平泉町史』資料編二、9－1。
- 9 入間田宣夫「古代・中世の松島寺」(『松島町史』通史編Ⅱ)・同1995「鎌倉建長寺と藤崎護国寺と安藤氏」(『津軽安藤氏と北方世界』河出書房新社)。
- 10 馬淵和雄 1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社。
- 11 岡陽一郎 2003「北条氏の地方支配を考える－その小さな空間から」(『Journal of North-east Asian Cultures』5(韓国))。
- 12 豊田武 1976『英雄と伝説』塙書房。
- 13 一連の指摘は齊藤利男1992『平泉 よみがえる中世都市』(岩波書店。229頁～)を参照。
- 14 大石直正「鎌倉時代の平泉」(『平泉町史』総論・論説編)。
- 15 遠藤巖 1974「平泉惣別当譜考」『国史談話会雑誌』17。
- 16 『吾妻鏡』文治五年九月二十八日条。
- 17 これについてはすでに『鎌倉市史』総説編で指摘されているが、この問題を都市の境界の持つ特質の中で論じた石井進氏の研究(石井進 1981「都市鎌倉における「地獄」の風景 御家人制研究会編『御家人制の研究』、吉川弘文館)は、都市平泉の境界を検討する時に実に示唆に富む。

付

今回の現地踏査に当たっては、吉田智哉(大正大学大学院)・佐竹行彦(青山学院大学大学院)の同行と協力を得た。この場を借りて感謝する。

柳之御所付近の沖積地の河川氾濫と河道痕跡の検出 —地形学的手法を用いて—

東北大学大学院理学研究科環境地理学講座 修士課程1年

野中 奈津子

I. はじめに

平泉・一関地区には、古来北上川の度重なる氾濫にともなう河道変遷を繰り返すことにより、広い沖積地が形成されてきた。当地区は、北上川の連続する峡谷である狐禅寺峡谷直上流に位置し、明治時代以降においても明治43年、大正2年、同19年、昭和19年、同22年、同23年の大洪水が記録されている。とくに昭和22年、23年のカスリン、アイオン台風による水害は当地区に甚大な被害をもたらした。平泉地区の柳之御所は、洪水常襲地帯に面して位置し、周辺地区においても北上川の河道変遷の痕跡が多く確認される。

本研究は、箱石橋から千歳橋に至る沖積地を対象に、地形学的手法を用い沖積地の地形分類および自然堆積層の分析を行うことにより、過去数千年間について、柳之御所などの歴史遺跡の立地に関わる地形的背景を考察しようとするものである。

II. 地域概観

北上川は岩手県岩手郡岩手町に源を発し、東方の北上山地と西方の奥羽山脈に挟まれた北上低地帯を北から南に流下し、岩手県南部の狐禅寺から約30kmにわたる狭窄部を経て宮城県に入る。その後宮城県津山町柳津付近で新北上川と旧北上川に分派し、それぞれ追波湾、石巻湾へ注ぐ流路延長249km、流域面積10,150km²の河川である。本研究の対象地域である平泉・一関地区は北上低地帯の南端部に位置し、河口からの距離は80~90kmの地点にある。対象地域における谷底低地の幅は2.1~4.0kmであり、河川勾配は0.3/1000~0.5/1000で極めて緩やかである。

対象地域を含む北上低地帯とその縁辺部には、北上川やその支流河川により中期更新世~完新世(およそ数十万年前~現在)に形成された河成段丘が発達している。また、段丘面上には北上川や支流河川の河道変遷の痕跡である旧河道が数多く残されている。

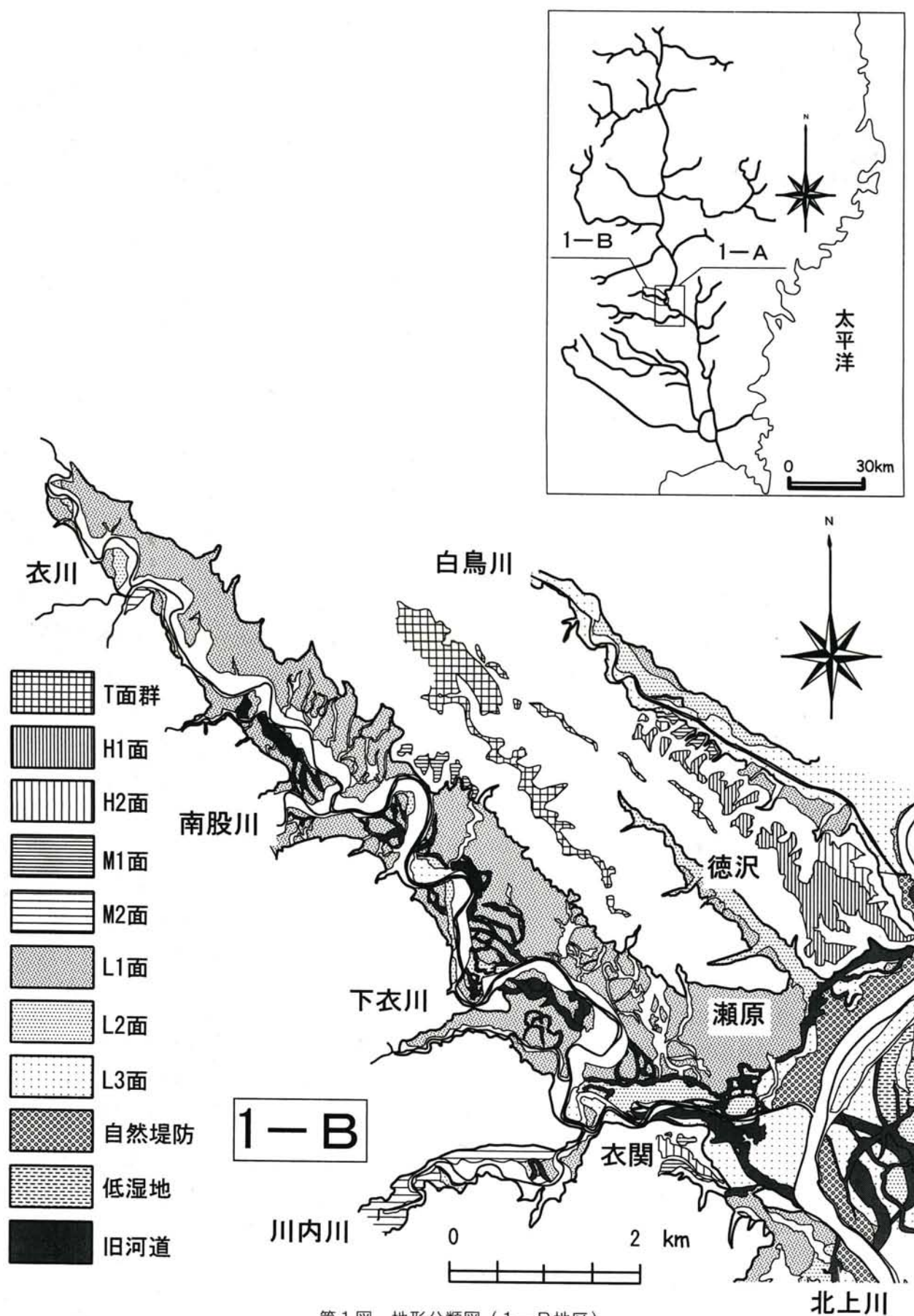
III. 対象地域における地形の特徴と分布

1. 河成段丘

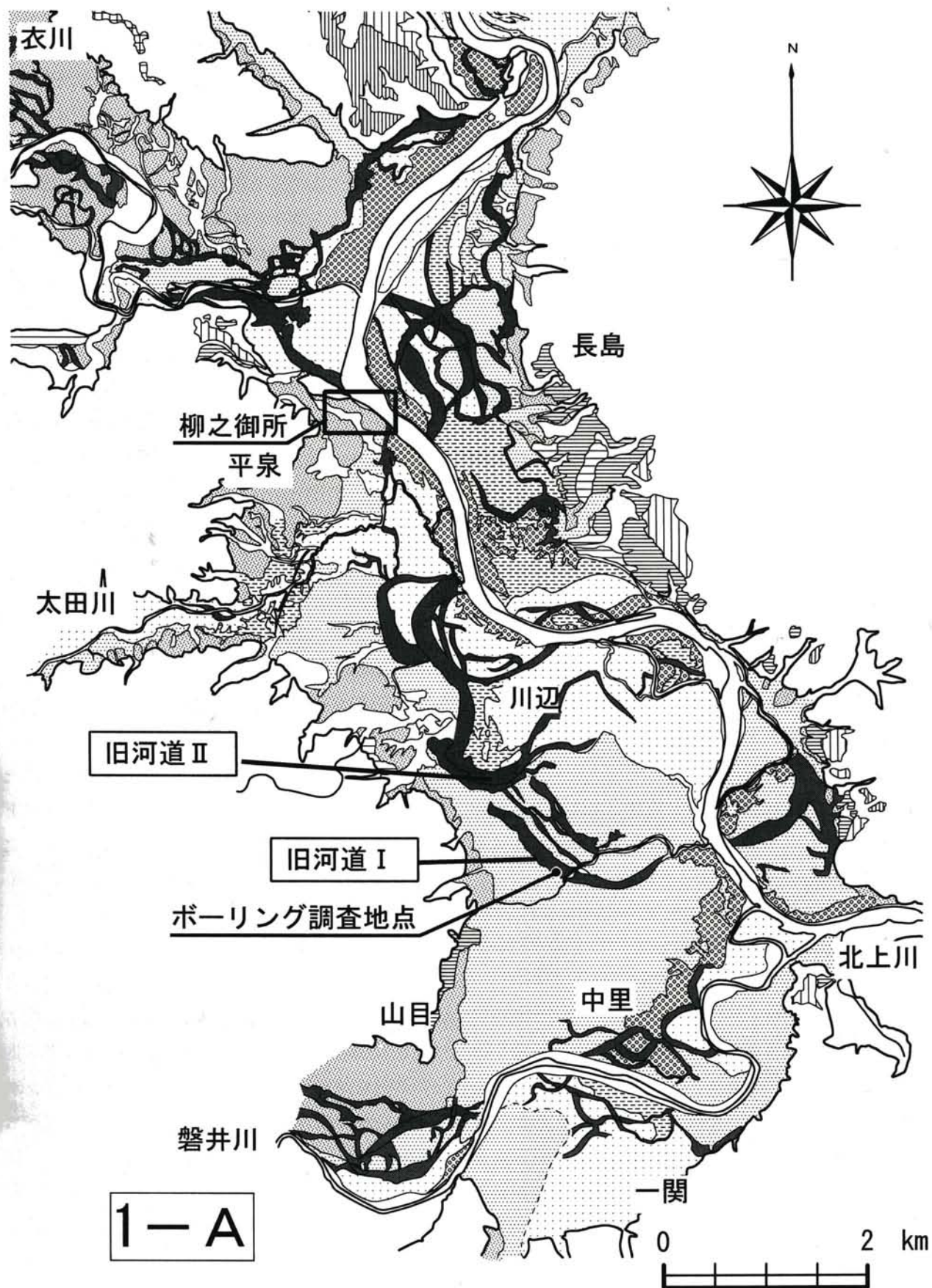
本研究では、現在の河床に近い比較的新しい河成段丘と旧河道地形に注目しながら1962年撮影の4万分の1空中写真判読および現地調査により地形分類を行った(第1図)。

河成段丘地形は気候変動にともなう土砂生産量の増減、河川の流量および勾配などの変化による河床高度の変化にともない形成され、かつての氾濫原である段丘面と、河床の低下によって侵食された段丘崖からなる階段状の地形である。河成段丘は、現河床に向かって段丘面の高度が低くなり、時代の古いものほど高位に位置する。

渡辺(1991)は盛岡から胆沢台地に至る北上低地帯とその周辺についてテフクロロジー¹⁾を用いて段丘面の編年を行い、T1~T3面を中期更新世(約45~20万年前)、H1、H2面を最終間氷期直前の時期(約15万年前付近)、M1面を最終間氷期中の寒冷期(8~9万年前)、M2面を最終氷期前半(5~6万年前)、L1面を最終氷期最盛期(約2万年前)にそれぞれ形成されたとした。本研究では研究対象地域における段丘面を



第1図 地形分類図(1-B地区)



第1図 地図分類図 (1-A地区)

高位から、T面群、H1面、H2面、M1面、M2面、L1面、L2面、そして現在でも頻繁に冠水する氾濫原としてのL3面に区分した(第1図)。段丘面の高度、比高および連続性をもとに、L1面より上位の段丘面についてその区分を渡辺(1991)の区分に対応させ、名称および年代は渡辺(1991)に従った。本研究で新たに区分したL2面、L3面については、形成時期に関する詳細な情報はこれまで得られていない。

本研究対象地域では、北上川沿いにおいてはL2、L3面が谷底の大部分を占め、L1面は丘陵基部に限られて分布する。L1面より高位の段丘面は北上川左岸の長島地区から西平地区周辺においてみられる。支流の衣川、磐井川沿いではL1面が広く分布し、L2、L3面は現河道に隣接した狭い範囲にみられる。奥州藤原氏に関わる遺跡などの立地については、中尊寺はH2面～M1面、柳之御所、無量光院そして毛越寺はL1面、長者原廃寺、接待館はL1面、L2面にそれぞれ立地している。

段丘面の高度については、L1面は箱石橋付近で40～50m、柳之御所付近では26～30m、高田では25～30m、JR山目駅付近および西平で25mであり(第2図)、段丘面の流下方向の勾配は2.2/1000～1.0/1000である。L2面は箱石橋付近で25～30m、矢崎で25m、佐野で20～22.5m、山目駅東方で20mであり(第2図)、段丘面の勾配は1.1/1000～0.6/1000である。L3面は箱石橋付近で22.5m、柳之御所対岸(北上川左岸部)で20m、川辺付近で20mであり(第2図)、段丘面の勾配は0.4/1000である。

猫間が淵はL1面とL2面を開析する谷地形であり、現在高館の北を通過し北上川に合流する桜川がかつては猫間が淵に位置しており、谷を形成したが河川争奪によって化石谷となったと考えられる。

2. 旧河道地形

旧河道地形は川筋が変わることによって取り残された河道跡であり、連続する凹地状の形態をもつ。現在では凹地のほとんどが泥炭や土砂などによって埋積され、周りの地表より0.5～1.5mほど低い。

研究対象地域では、L1面を含む下位の段丘面上に旧河道地形が認められる(第1図)。北上川沿いの地域ではL2面およびL3面上に北上川の旧河道が認められるが、とくにL3面上には多くの旧河道が認められる。衣川および磐井川沿いにはL1面上にもいくつもの旧河道が認められる。これらの段丘面上に残された旧河道は段丘面形成期の河道の痕跡と考えられ、洪水時における河道の変遷にともなって放棄されたものと考えられる。したがって河道の放棄時期を求めることにより、時代ごとの河道位置の変化や洪水頻度などについての検討も可能である。

IV. 旧河道埋積堆積物の特徴

L2面上に位置する旧河道I(第1図)において、パーカッション式ボーリング調査を行った(第3図)。ここでは地表から深度1.86mまでは青灰色粘土が堆積し、1.86mから最深の4.55mまでは泥炭が堆積している。旧河道は一般に最下底に河床堆積物があり、その上位には河道放棄後の凹地を埋積する堆積物がみられる。ここではこの旧河道が北上川の河道として活動していた当時の河床堆積物を確認することはできなかったが、ボーリングコア最深部の泥炭の堆積年代は河道放棄年代に近い値を示すと考え、放射性炭素年代測定を行った。放射性炭素年代測定については加速器分析研究所に依頼した。その結果 $2,620 \pm 100 \text{ yrBP}^{2)}$ (IAA-597) (縄文時代晩期)の年代値を得た。旧河道の埋積堆積物は深度1.86mを境に下位は流水の影響が認められない泥炭層が堆積しているのに対し、上位は流水によって運ばれ堆積したと考えられる粘土層へ変化している。このような堆積環境の変化が生じた時期を明らかにするため、泥炭層最上部の放射性炭素年代測定を行い、 $650 \pm 50 \text{ yrBP}$ (IAA-652) (鎌倉時代後期)の年代値を得た。また深度2.41～2.38mには火山灰層がみられ、泥炭層最上部の年代からおそらく10世紀初頭に降下した十和田a火山灰と思われる。

L 3 面上に位置する旧河道 II (第 1 図) では、検土杖を用いて旧河道埋積堆積物の断面調査を行った。ここでは青灰色の粘土層が地表からほぼ連続して 4 m 以上堆積していることが確認できたが、それより下位の堆積層を把握することはできなかった。

なお、L 2 面および L 3 面の段丘面上から検土杖を用いて堆積物の調査を行った結果、地表付近はともに旧河道堆積物とは異なる褐色の細粒砂～粘土が堆積していることが確認でき、旧河道とそれ以外の地表面は堆積物からも区別することができる。

V. 考察

1. 洪水頻度の変化に関して

L 2 面上の旧河道埋積堆積物の堆積層相から、対象地域における洪水頻度の変化について検討を行った。前述したように L 2 面上の旧河道 I は少なくともおよそ 2,600yrBP (縄文時代晩期) には放棄され、その後 650yrBP (鎌倉時代後期) までほぼ連続して泥炭層が堆積する環境にあった。旧河道は段丘面のなかでも地表面高度の低い凹地であるため、洪水時には浸水しやすく、対象地域における近年の洪水による浸水状況からその傾向がみられる。しかし、深度 4.55～1.96m に堆積する泥炭層中には、洪水時に流水によって運ばれ堆積したと考えられる堆積物の挟在は認められない。

一方 L 2 面上にはほかにも幾つかの旧河道が認められ、L 2 面の形成期に北上川の河道が頻繁に変化していたことがうかがえる。河道の変遷は洪水時に生じるため、河道の移動が活発な時期には洪水の発生頻度も高かった可能性がある。このような、洪水の痕跡が旧河道 I における 2,600～650yrBP の旧河道埋積堆積物中にみられないことから、同時期においては L 2 面に強い洪水流がおよぶ頻度が低下していたのではないかと考えられる。また、奥州藤原氏の時代の重要な館と考えられる接待館が衣川の形成した L 2 面上に存在することからも、この時期 L 2 面は洪水による浸水被害を受けにくい状況であったと考えられる。

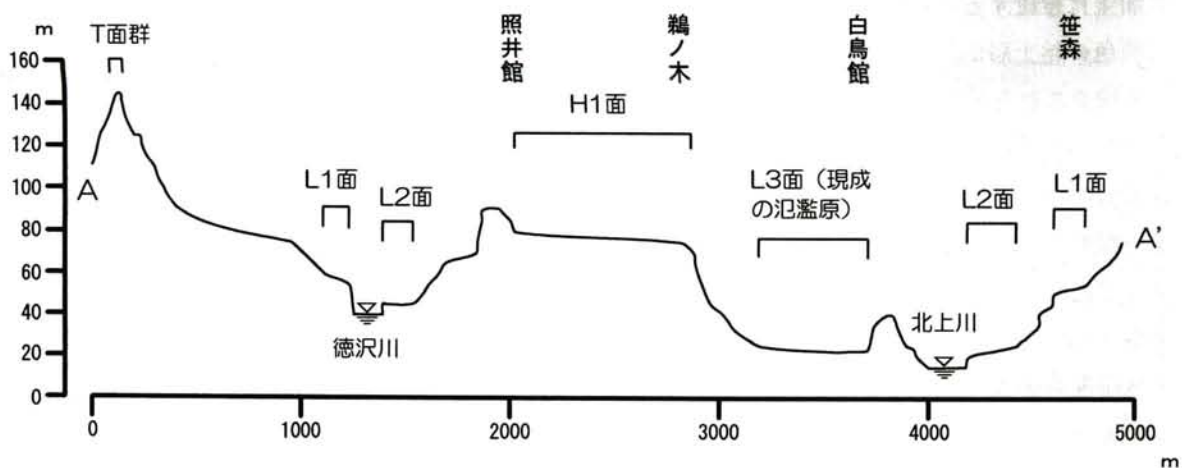
650yrBP 以降旧河道には粘土層が堆積していることから、L 2 面も水没する洪水の頻度が高くなったと考えられる。さらに、L 3 面上にみられる幾つもの旧河道は、650yrBP 以降洪水頻度が高く、河道が不安定になったことにより形成された可能性がある。

2. 段丘面の形成時期に関して

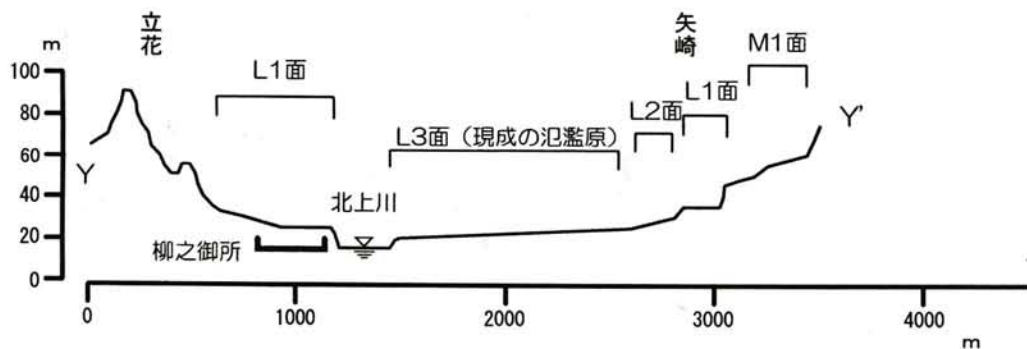
ここでは衣川および磐井川沿いに広く分布し、柳之御所をはじめとする平泉文化の重要な遺跡が立地する L 1 面離水後の低位段丘面の形成について、旧河道の埋積過程および段丘面上の遺跡の成立時期をもとに検討した。

L 2 面上の旧河道の放棄時期が 2,620yrBP (縄文時代晩期) より以前であることから、少なくとも縄文時代晩期には L 2 面が存在していたと考えられる。さらに、柳之御所の対岸に位置し L 2 面上に立地する里遺跡において縄文時代晩期～弥生時代初頭の遺跡の存在が確認されている。また、猫間が淵が L 1、L 2 面を開析する谷であり、谷の埋積堆積物から縄文時代後期の遺跡が確認されており谷は縄文時代後期以前に形成されていることから、L 2 面は縄文時代後期には存在していたと考えられる。これらのことから L 1 面の離水したおよそ 2 万年前 (後期旧石器時代) 以降北上川は L 2 面の形成に向けて下刻期が訪れたが、少なくとも縄文時代後期には L 2 面が形成されていたと考えられる。

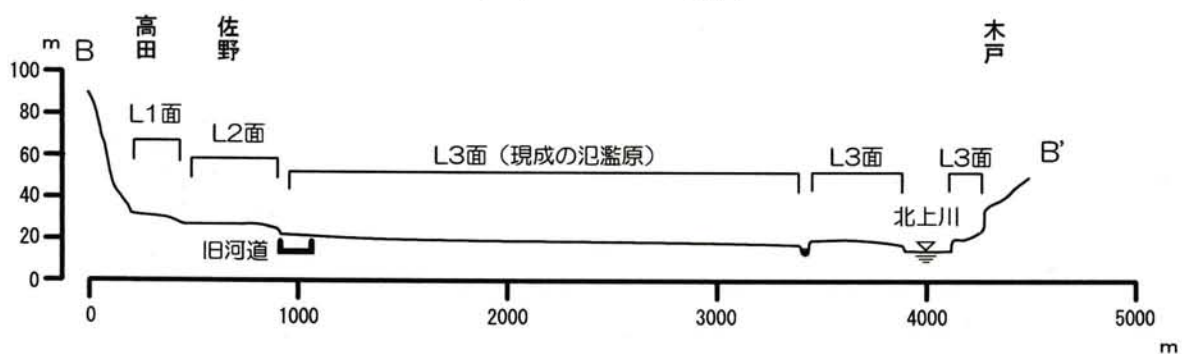
L 3 面上の平泉町三日町の東に位置する高玉遺跡において 9～10 世紀 (平安時代前期) の遺構および遺物が確認されていることから、この頃にはすでに L 3 面の概形は形成されていたと考えられる。旧河道 I において、河道の放棄後少なくとも 2,620～650yrBP の間は泥炭層が連続して堆積し (第 3 図)、流水の影響をほとん



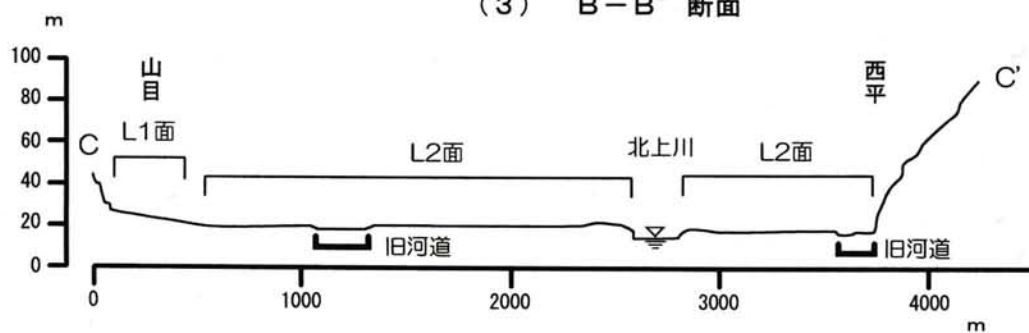
(1) A-A' 断面



(2) Y-Y' 断面

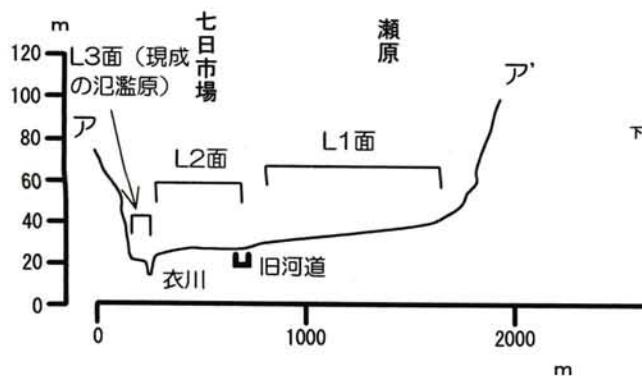


(3) B-B' 断面

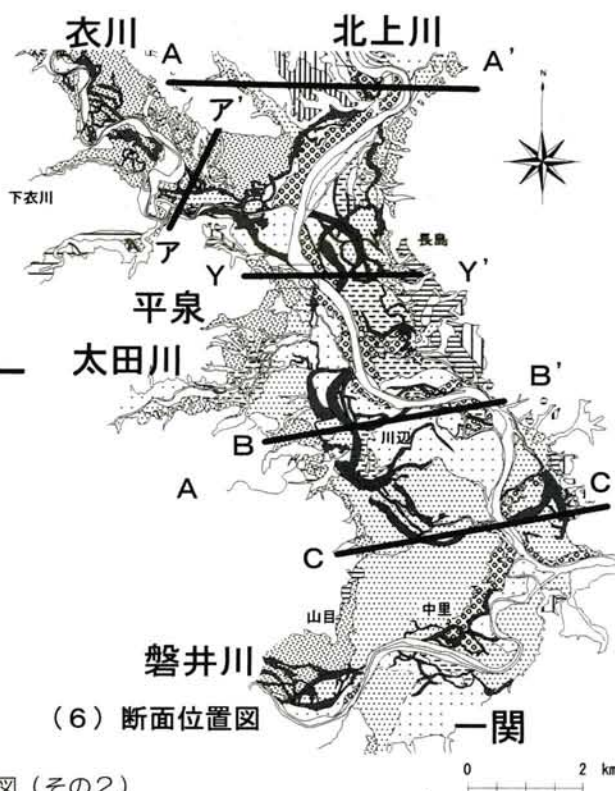


(4) C-C' 断面

第2図 地形断面図 (その1)

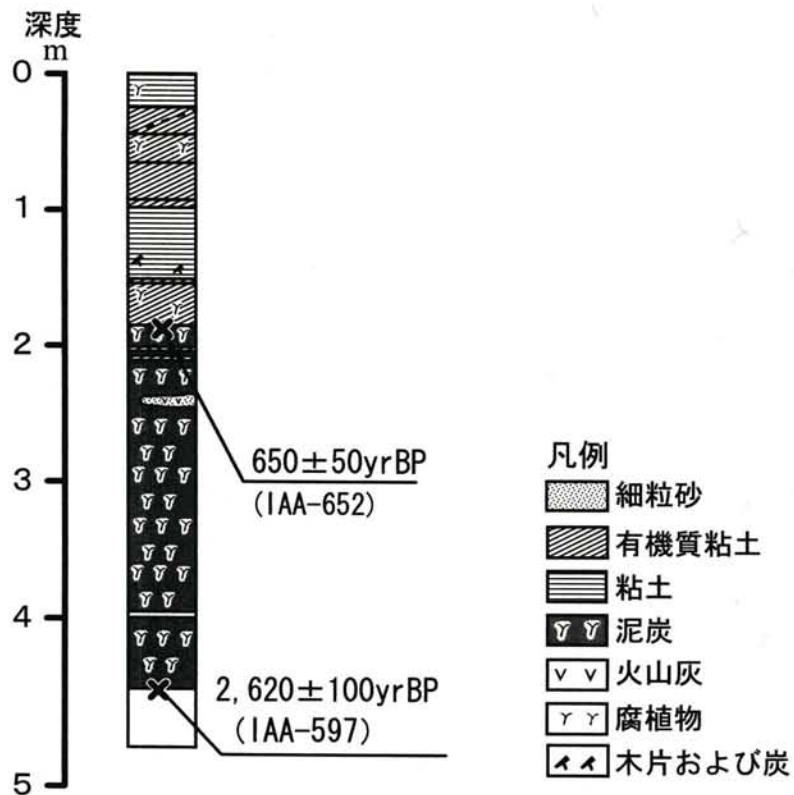


(5) アーア' 断面



(6) 断面位置図

第2図 地形断面図 (その2)



第3図 ボーリング柱状図 (旧河道 I)

ど受けていない。これらのことから、縄文時代晩期～平安時代前期の間に河川の下刻が起こり、河床高度が少なくともL3面まで低下したと考えられる。650yrBP以降L2面においても流水の影響が認められるようになることから、L3面の形成にあたり河床高度が次第に上昇してきたことも考えられる。

VI. 12世紀前後の平泉

過去およそ2万年間の地形環境についての考察をもとに、奥州藤原氏によって平泉文化が開いた12世紀前後の地形および河川の状況は以下のように考えられる。

9～10世にはL3面の概形がおおむね形成されており、河成段丘地形は現在とほぼ変わらない状況にあったと考えられるが、河床高度はより低かったのではないかと推定される。接待館が衣川沿いのL2面に立地することや、L2面上の旧河道Iの埋積堆積物の状況から、当時は洪水頻度が低く北上川などの河道も安定していたのではないかと考えられる。猫間が淵の谷を形成した小河川は縄文時代後期にはすでに高館の北に移り、猫間が淵は上流を争奪されたいわゆる化石谷となり流水を失って埋積が進行する状況にあったと考えられる。

奇しくも奥州藤原氏滅亡後、鎌倉時代後期になると洪水頻度が高くなり河道が不安定になったと考えられる。また、洪水時にはL2面まで浸水がおよび、北上川の河道変遷も活発になったと考えられる。この時期以降の河道の移動により柳之御所の一部も侵食されるようになったと推定される。

註

- 1) 火山灰の降下年代や堆積の状況から地形面の編年を行う手法。
- 2) 放射線炭素年代：1950年からの逆算年代であるが、必ずしも暦年代ではない。

参考文献

- 阿子島 功(1968)：北上川中下流域の河谷底の構造，東北地理，20，206-214。
- 川本忠平・千田 昇(1980)：1979年8月4日～7日の豪雨による北上川流域の水害について，東北地理，32，127-137。
- 斉藤享治(1978)：岩手県胆沢川流域における段丘形成，地理学評論，51，852-863。
- 渡辺満久(1991)：北上低地における河成段丘面の編年および後期更新世における岩屑供給，第四紀研究，30，19-42。
- 建設省東北地方建設局(1991)：北上川百年史，山海堂，92p。

柳之御所遺跡中心域における遺構の変遷(中間報告) ～史跡整備計画との関わりを中心に～

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課柳之御所班

1 はじめに

岩手県教育委員会では、平成9年(1997)3月に史跡指定された柳之御所遺跡の整備にむけて、平成10年度(1998)より現地に調査事務所を開設し、継続的に内容確認調査を実施してきている。その成果については年度ごとに発掘調査概報を発刊して公表してきているが、平成16年度(2004)末には、岩手県教育委員会の調査成果を「総括報告書」(岩手県教委2004、以下「総括」)としてまとめ、平成23年度(2011)完了をめざした史跡整備の基礎資料として提示した。

しかし、掘立柱建物跡を主とする遺構の変遷を正確に跡付けることは非常に困難な作業で、建物のどの要素を重視するかによって、遺構の並存や前後関係についての解釈が分かれる場合がある。その結果、同時に発刊した「史跡柳之御所遺跡整備実施計画」(岩手県教育委員会部内資料2004)記載内容と、「総括」記載内容が異なる結果となり、関係各方面に混乱した情報を提供してしまった。

本稿では、その後の検討によって、柳之御所遺跡堀内部地区のうち、中心域と考えられる28SB1～8掘立柱建物跡周辺の遺構変遷について、一定の見通しが得られたと考えられたことから、それらの変遷を再整理して提示するものである。

2 「総括」記載内容と中心域建物復元計画について

「総括」においては、柳之御所遺跡における遺構の変遷について、12世紀初頭からの90年間を大きく3段階に区分することができると考え、古い順にⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期とした。さらにⅡ期とⅢ期については、新旧に区分できる可能性を考慮し、a、bの記号を付してそれぞれを2段階に細分した。

一方で、かわらけについては1期～6期の6段階に区分する案に基づき建物変遷との対応を試みたが、具体的な説明ができるにいたらず、どの段階の建物群がかわらけ編年のどの段階にあたるかについては、課題を残す結果となった。

柳之御所遺跡の整備は、三代秀衡期が遺跡の最盛期であるとの認識から、その時期に該当する建物群やその他の遺構を抽出し、建造物の復元や表示などを行う計画となっている。そのうち、中心域復元計画では、堀内部地区で55SB6に次ぐ平面規模を持つ4間×9間の南北棟である28SB4と、それと対応する可能性をもつ28SB2(又は28SB1)等を復元する計画であり、その具体的な存続年代等についてより確実な考証を行う必要に迫られている。

「総括」では、以下のように提示した。

Ⅰ期：28SB2、28SB6、28SB8

Ⅱ期：28SB1、28SB3、28SB7(28SB1と7は重複、新旧不明)

Ⅲ期：28SB4、28SB9、55SX2

この段階ですでに、28SB4と同時存在として示したものの中に、28SB1又は2がなく、整備計画と不整合をきたしている。また、そもそも、柳之御所遺跡の建物変遷を跡付けるにあたり、Ⅰ期、Ⅱ期などという段階的区分が可能なのか、言い換えれば、建物の建替え等は、ある時期に一気に行われているものなのか、という観点からの考察が十分であったとはいいがたかった。

本中間報告の中では、掘立柱建物跡の場合、遺物の出土が少量でその時期決定に困難をきたすという観点から、遺跡内でもっとも多量に出土し、時間差を敏感に反映していると考えられるかわらけを出土する遺構から掘立柱建物跡の存続年代を推定し、整備計画が具体的根拠をもって示すことが可能かどうかについて検討することとした。

3 遺構の前後関係の整理

ここで遺構の重複関係を整理するが、とくに、井戸状遺構(以下、井戸)及び土坑類との関係を重視する。これらの遺構ではかわらけをはじめ、年代を推定する手がかりとなる遺物が出土している場合がある。重複による時間的前後関係については、基本的に過去の調査報告書の記述による以外の方法はない。しかし、ひとつ注意しておかなければならないのは、埋蔵文化財センター報告書に従う限り、この中心域では7基確認されている井戸より新しい建物跡が報告されていないことである。後述のとおり、廃棄されたかわらけの年代にはそれぞれ前後関係があると考えられる。また、井戸は、祭祀遺構などと異なって、一定の存続幅を見込む必要がある。この状況から、中心域における建物変遷を矛盾なく組立てることは不可能である。

これより、井戸と掘立柱建物跡を構成する柱穴跡との関係については、以下の観点で再検討を行って、現在残されている写真類や文字記録、及び調査担当者等への聞き取りを行うこととした。現段階では、報告書記載図の読み取り以外に確実な当時の調査状況の再現ができていないが、可能な限り今後も継続する予定である。

- ・井戸は比較的検出が容易で、また、埋土に強い特徴をもつ場合が多いため、柱穴跡との前後関係に誤認があった可能性がある。
- ・井戸埋没後に掘削された柱穴跡の埋土は、井戸の埋土の一部と識別が困難である。
- ・報告書刊行段階において、柳之御所遺跡は12世紀後半の40年余りに4時期の変遷が認められるとされたため、それにあわせた解釈を行った可能性がある。

以下、個別に検討する(図1)。なお、ここで直接重複とは建物遺構を構成する個別の柱穴等が直接重なる場合、間接重複とは個別の柱穴等の重なりはないものの、建物遺構等が空間的に重なる場合をいう。

28SB1(4間×5間、四面庇)

直接重複: 28SB6より新(柱どうしの重複関係がある)

28SX1より新(柱のひとつがこの遺構を掘り込んでいる)

28SE1より新(埋文報告書では古。28SE1断面図のPP13が28SB1の柱穴跡であると判断)

28SA1より新(柱と塀状の溝跡が重複)

間接重複: 28SB2、28SB7、28SE2、28SA3

28SB2(4間×5間、四面庇)

直接重複: 28SE2より新(埋文報告書では古。28SE2の断面図に、井戸の単純な埋没後に掘り込まれたと考えられる斜方向の土層が観察されるため、掘込み等があったと判断)

28SE6より新(埋文報告書では古。本文の記述から、井戸最上層は後年の堆積物である可能性が指摘され、柱穴跡との厳密な前後関係の把握は困難と判断)

28SB7より古?(柱どうしの重複関係がある、ただし要検討)

間接重複: 28SB1、28SB3、28SB6、28SE7、28SE8、28SE9、28SK11、28SK13、28SA1

28SB3(4間×4間以上、四面庇か)

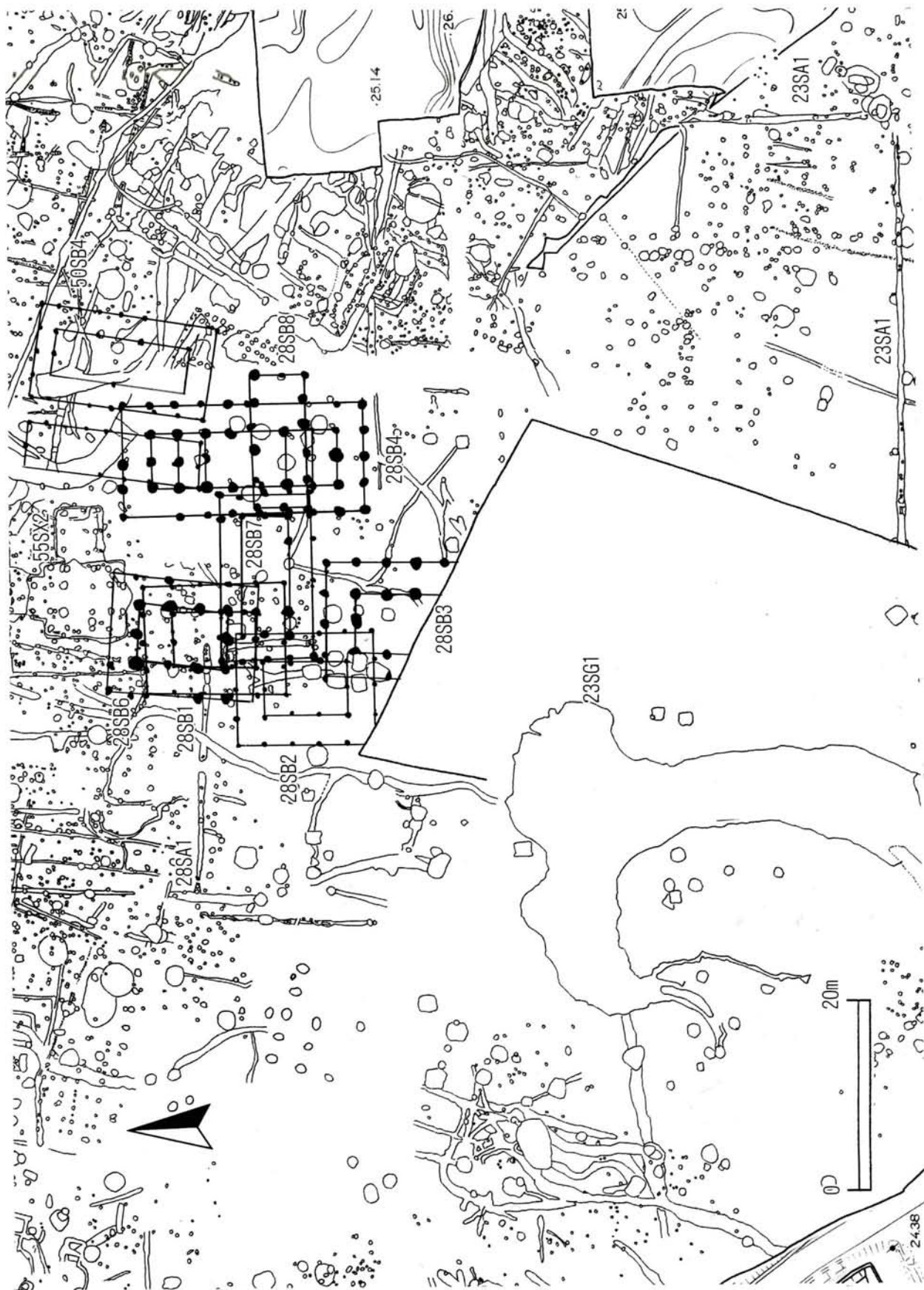


図1 中心域遺構等配置図

直接重複：28SE8より古(柱穴位置に井戸が掘られている)

：28SE9より古(柱穴位置に井戸が掘られている)

：28SK11より古(柱穴位置に土坑が掘られている。ただし、28SK11の一部にこの柱穴の張り出しが認められる)

：28SK13より古(柱穴位置に土坑が掘られている)

間接重複：28SB2、28SK15

28SB4(4間×9間、四面庇)

直接重複：28SE11より古(柱穴位置に井戸が掘られている)

：28SK14より古(柱穴位置に井戸が掘られている)

：50SB4より古(柱穴どうしの重複関係がある)

：28SB7(埋土観察では新旧関係不明)

：28SB8より古(第59次調査で柱穴どうしの重複関係があることを確認)

28SB6(2間×3間)

直接重複：28SB1より古(柱穴どうしの新旧関係がある)

：28SB7より古(柱穴どうしの重複関係がある)

：28SE1より古(柱穴と井戸に重複関係がある)

：28SE2より古(柱穴と井戸に重複関係がある)

間接重複：28SB2、28SA1

28SB7(7間×4間、四面庇?)

直接重複：28SB2より新?(埋文報告書記載による、ただし要検討)

：28SB6より新(柱穴どうしの重複関係がある)

：28SB4(埋土観察では新旧関係不明)

：28SB8(埋土観察では新旧関係不明)

：28SE2より新

(柱穴と井戸に重複関係がある)

間接重複：28SB1、28SK6、28SK12、28SK30

28SB8(5間×2間)

直接重複：28SB4より新

(第59次調査で柱穴どうしの重複関係
があることを確認)

：28SB7(埋土観察では新旧関係不明)

間接重複：28SE11

以上の関係を図2にまとめる。

4 中心域建物群の推定年代

以上のように、柳之御所遺跡の中心域建物群は、古
何度かの建替えが行われていることは明らかである
ただし、直接その関係を示すことができるものは少

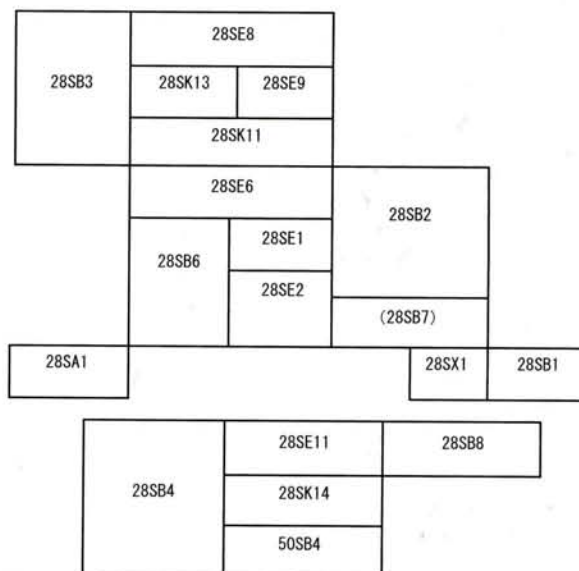


図2 柳之御所遺跡中心域における遺構の重複関係
直接の重複関係を横方向に示したもの
縦方向については便宜的に並べているので実際の並行関係は不明

なく、それぞれの存続年代についてもこのままでは明らかでない。そこで、重複している遺構のうち、出土遺物によって年代が推定できるものを手掛かりに、建物群の年代を推定することとする。

直接的又は間接的に7棟の掘立柱建物跡と重複している遺構のうち、一定量の遺物を出土し、年代推定が可能と考えられた遺構は次のとおりである。

28SE2、28SE7、28SE9、28SE11、28SX1

その根拠の詳細については佐藤の別稿(佐藤投稿中)を参照されたい。以下、個別に若干の説明を加えたい。

28SE2

遺物出土状態：井戸への一括埋没

折敷年輪年代：1130年、1141年

ロクロかわらけ大皿の器高：平均値37.8mm(n=19)、40mm未満の割合89.5%

手づくねかわらけ大皿の口径：平均値148.6mm(n=14)、145mm未満の割合35.7%

手づくねかわらけ小皿の口径：平均値98.3mm(n=8)、95mm未満の割合0%

28SE7

遺物出土状態：井戸への一括埋没

ロクロかわらけ大皿の器高：平均値37.8mm(n=5)、40mm未満の割合60%

28SE9

遺物出土状態：井戸への一括埋没

ロクロかわらけ大皿の器高：平均値40.3mm(n=26)、40mm未満の割合57.7%

28SE11

遺物出土状態：井戸への一括埋没

折敷年輪年代：1179年

ロクロかわらけ大皿の器高：平均値33mm(n=11)、40mm未満の割合100%

28SX1

遺物出土状態：祭祀行為による一括埋没

手づくねかわらけ小皿の口径：平均値84.7mm(n=7)、95mm未満の割合100%

以上より、それぞれの遺構の埋没年代について以下のように推定した。

28SE2：1150年以前

28SE7：1150年以前

28SE9：1125年以前

28SE11：1180年代

28SX1：1170年以降

しかし、ここで示した埋没年代はおおむねの目安として考えられるものの、廃棄行為による形態変化傾向に基づく時間の把握には限界があるので、年代推定には幅を見込む必要がある。そこで、前後に10年程度の幅をみることにした。年輪年代が示されている28SE2と28SE11については、上限値が抑えられていると考えられるので、それ以降の年代幅をみた。

さらに、28SX1を除いた4基の井戸については、使用期間を見込む必要がある。遺跡内では現在56基の井戸が確認されている。個々の井戸の存続年代を推定することは困難なので、仮に1時期に平均的に10基程度が機能していたものとし、1基あたり15年～20年間の使用期間を見込むこととする。

以上より、遺構の埋没年代と存続期間の関係をまとめる(表1)。

この推定存続年代を用いた場合、中心建物の存続年代は次のように整理される。

28SB3：この遺構より新しい28SE9が12世紀第1四半期ごろと考えられることから、11世紀末から12世紀初頭の建物と考えられる。遺跡内でもっとも古い段階のもののひとつであろう。

28SB6：この遺構より新しい28SE2が12世紀第2四半期ごろと考えられることから、12世紀第1四半期を中心とする建物と考えられる。28SB3の建替えとみることも可能。

28SB4：この遺構より新しい28SE11が1160年代中ごろから80年代と考えられることから、下限を1160年代中ごろ(もっとも新しくみた場合に70年代前半)におくことができる。また、第59次調査において出土した、柱抜き

取り痕出土のロクロかわらけ及び手づくねかわらけの法量からも、抜き取りの時期をこの段階とみなすことが可能である。しかし、この建物より古い遺構が不明確なので、上限の設定が困難である。

28SB2：この遺構より古い28SE2が12世紀第2四半期ごろと考えられることから、12世紀第3四半期ごろ存続していた建物であると考えられる。28SB3、28SB6、28SE7、28SE9と並存しないことも、これと整合する。下限については、28SB1の上限と関係する。

28SB1：この遺構より古い28SX1を1175年の祭祀遺構とすると、下限を1189年とする12世紀第4四半期の建物となる。

28SB7：12世紀第3四半期以前の28SB4と並存せず、しかも、第4四半期ごろの28SB1とも並存しないとされる。

この遺構については今後さらに検討を加えたい。

28SB8：28SB7、28SE11と並存せず、28SB4より新しいので、1180年代後半以降の建物と考えられる。

50SB4：28SB4より新しい遺構なので、1170年代以降の建物と考えられる。

28SA1、28SA3：28SA1は28SX1以前であるので、下限を仮に1175年ごろとみておく。一方で28SB6と並存しないことから、12世紀第2四半期～第3四半期後半ごろにかけて存続した可能性がある。28SB6より古い段階の、11世紀末の遺構とみることも可能。28SA3は28SA1を補完して、どちらかの時期の遺構とみなすことができる。

以上の検討結果を、図3にまとめることとする。

表1 各遺構の推定埋没年代と推定存続年代

遺構名	年 代 見 積 り	推定 埋没 年代	存続期間		
			15年	20年	一時的
28SE2	古め	1141	1126～1141	1121～1141	
	標準	1145	1130～1145	1125～1145	
	新しめ	1150	1135～1150	1130～1150	
28SE7	古め	1140	1125～1140	1120～1140	
	標準	1145	1130～1145	1125～1145	
	新しめ	1150	1135～1150	1130～1150	
28SE9	古め	1120	1105～1120	1100～1120	
	標準	1125	1110～1125	1105～1125	
	新しめ	1130	1115～1130	1110～1130	
28SE11	古め	1179	1164～1179	1159～1179	
	標準	1185	1170～1185	1165～1185	
	新しめ	1189	1174～1189	1169～1189	
28SX1	古め	1170			1170
	標準	1175			1175
	新しめ	1180			1180

年代 遺構名	1090	1100	1125	1150	1175	1190
28SB3						
28SB6						
28SB4						
28SB2						
28SB1						
28SB7				(今後検討)		
28SB8						
50SB4						

図3 柳之御所遺跡中心域における掘立柱建物跡の変遷

28SB4薄いアミ部分は、上限設定が不確実であることを示したものである

5 55SX2竪穴建物跡について

平成13年度に行った第55次調査においては、堀内部地区北端近くに55SB6とした6間×6間の大型掘立柱建物跡を検出したほか、55SX1、55SX2とした2基の性格不明の遺構が検出されている。このうち、55SX1については、祭祀遺構であろうと推測している。

一方で、55SX2(図4)は、今回検討した掘立柱建物群の北東側に隣接して所在しているもので、遺構立体表示等の手法で整備することを計画している。

この遺構は、現段階で遺跡内唯一の竪穴建物である。東西7m×南北8m、検出面からの深さ約70~80cmのやや南北に長い長方形竪穴の、東側と北側に床面が一段高くなった方形の張り出しが付随している。調査所見からは、遺構どうしの重複とは認められないため、一つの建物を構成する遺構と考えられている。床面積111.5㎡。床面には計31個の柱穴が確認され、それらには柱あたりが確認できるものがほとんどである。柱配置は壁面に沿ってめぐるほか、長方形竪穴の長軸に沿って2列確認できる。また、55SA1が建物北側に接し、西側に延びて二重に竪穴を覆うように配置されている。

この竪穴の埋土は、黄色ロームを中心に構成されていて、人為的に一時的に埋め戻されたと推定される。また、柱あたりが確認できることから、遺棄又は廃棄された後そのまま放置された可能性が高い。埋土中から、500kgをこえるかわらけ及びかわらけ片が出土したほか、ごくわずか、渥美陶器の破片や平瓦片も得られている。

出土したかわらけについての年代推定を試みると、

ロクロかわらけ大皿の器高：平均値34.0mm(n=179)、40mm未満の割合94.4%

手づくねかわらけ大皿の口径：平均値137.7mm(n=272)、145mm未満の割合82.7%

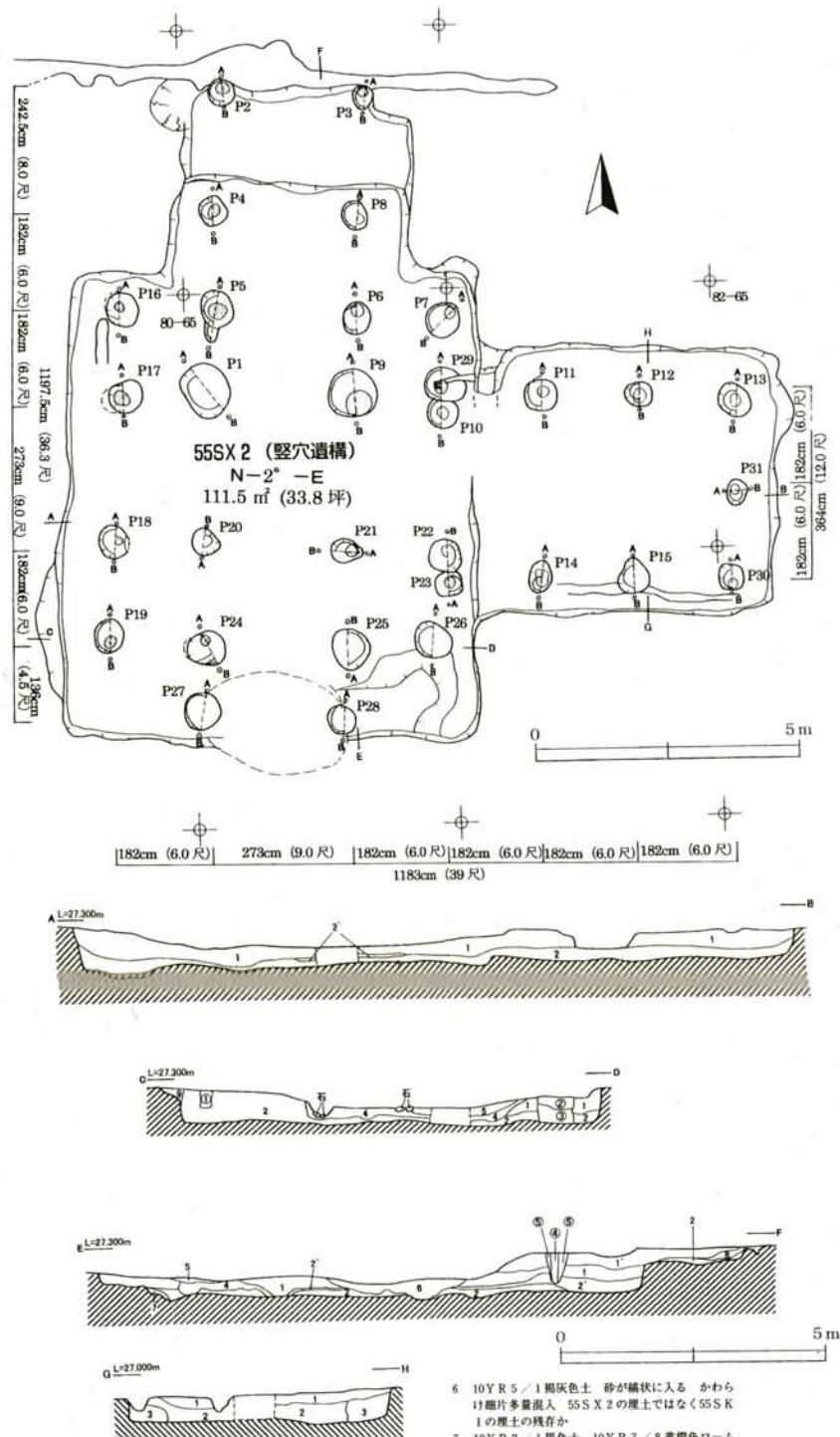
手づくねかわらけ小皿の口径：平均値87.3mm(n=19)、95mm未満の割合89.5%

これらの数値は、ロクロかわらけ大皿と手づくねかわらけ小皿が12世紀第4四半期的であるのに対し、手づくねかわらけ大皿は若干古い様相を呈し、1175年前後とみることができ、遺物の所属時期にわずかな差がありそうである。すなわち、この遺構は、一時的埋没であることは疑いないとしても、他の多くの一括埋没の遺構と異なって、ある一時期のかわらけを無作為に廃棄したものとはみなせないのではないかと考えられる。この遺構の性格を解く手がかりを『吾妻鏡』に求めてみた。

『吾妻鏡』文治5年8月22日条には、「泰衡平泉館、…数町之縁辺寂寞而無人、累跡之郭内、弥滅而有地、…但當于坤角(筆者注：平泉館の南西方向)、有一字倉廩、遁余焰之難」とある。平泉館内の「高屋宝蔵等」が消失した中で、「倉廩」のみが残っていたと伝えている。

倉廩は「米や穀物類を納めておく倉」(日本国語大辞典)とされるものの、内部には「沈紫檀以下唐木厨子」が数脚あって、この中に、「牛玉、犀角、象牙笛、水牛角、紺瑠璃等笏、金沓、玉幡、金花鬘、蜀江錦直垂、不縫帷、金造鶴、銀造猫、瑠璃燈炉、南庭百…」などが納められていた。これらは葛西清重らに分配されている。

この「倉廩」にあたる遺構が、55SX2ではないかと考えている(図5)。吾妻鏡記載品の他にどのようなものが納められていたかは推測の域を出ないが、出土した多量のかわらけは、鎌倉御家人たちが所望しなかった、すなわち、戦利品としての価値に乏しいものとして、そこに残されたものなのではないだろうか。また、用語の上でも「倉廩」を「高屋」=掘立柱建物と区別して用いているようである。



55SX 2

- 1 2.5Y 7 / 8 黄色ローム 10Y R 5 / 2 灰黄褐色土 横状に少量混入。かわらけ片、礫を少量含む。人為的に埋めた土
- 2 10Y R 5 / 2 灰黄褐色土 2.5Y 7 / 8 黄色ローム まだらに多量混入。炭化物粒、かわらけ片 (完形も多い) 多量混入
- 2' 10Y R 7 / 1 灰白色土 水成層か
- 3 10Y R 7 / 8 黄褐色ローム 10Y R 5 / 2 灰黄褐色土ブロックで少量混入。10Y R 7 / 8 黄褐色ローム まだら少量混入。柱痕
- 4 10Y R 4 / 1 褐灰色土。かわらけ細片非常に多量に混入。下部には完形かわらけを非常に多量に混入。炭化物粒多量に混入
- 5 2.5Y 7 / 8 黄色ローム 10Y R 5 / 2 灰黄褐色土横状に少量混入。かわらけ細片礫を含む。1層に類似する

- 6 10Y R 5 / 1 褐灰色土 砂が横状に入る。かわらけ細片多量混入。55SX 2 の埋土ではなく 55SX 1 の埋土の残存か
- 7 10Y R 2 / 1 黒色土 10Y R 7 / 8 黄褐色ローム まだら多量混入
- 8 10Y R 6 / 1 褐灰色土。かわらけ細片多量混入あまりしきがない。板の抜き取り痕か
- 9 10Y R 1.7 / 1 黒色土。炭化物粒多量混入。しまりなし
- P1458
① 10Y R 3 / 2 黒褐色土。炭化物粒多量混入
- 55SX 2 を切る別個の土坑か、または SX 2 P26
- ② 10Y R 7 / 4 に近い黄褐色ローム。炭化物粒少量混入
- ③ 10Y R 6 / 2 灰黄褐色土。炭化物粒少量混入
- P516
④ 10Y R 5 / 2 灰黄褐色土。礫少量混入。柱痕
- ⑤ 10Y R 7 / 8 黄褐色ローム 10Y R 5 / 2 灰黄褐色土 まだら少量混入。掘方の土

図4 55SX2竪穴遺構



図5 文治5年段階「平泉館」位置想定範囲

6 今後の課題

今回は詳細な検討ができなかったが、55SX2が平泉館の「坤」にあるとしたなら、その北東に「泰衡平泉館」が位置する必要がある。ここで検討してきた中心域においては、最大規模の28SB4はこの段階では解体していたと考えられるので、ほぼ確実に1180年代と考えられたのは28SB1のみであり、すでに中心とという要素が失われている。その場合、中心域南西に位置する園地(23SG1)は、どの建物と同時に機能していたのであろうか。

一方で、50SB4や55SB6のような、規格性の高い大型建物が中心域北側に展開する可能性があることなどを踏まえ、1170年以降の掘立柱建物について、おって明らかにしていく必要がある。

今回の検討にあたり、当課旧職員をはじめ、昭和63年(1988)より柳之御所遺跡の調査及び資料整理を担当された(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター及び平泉町教育委員会の現旧職員のかたがたに適切な指導をいただいた。この場をお借りして御礼申し上げる。

(主査 佐藤嘉広、文化財調査員 杉沢昭太郎、文化財調査員 大関真人、文化財調査員 佐藤淳一)

参考文献

- 井出靖夫 2004 平泉成立前後における土器様式の変遷 「平泉文化研究年報」4 pp.41～50
- 岩手県教育委員会 2000 「柳之御所遺跡―第50次発掘調査概報―」岩手県文化財調査報告書第107集
- 岩手県教育委員会 2001 「柳之御所遺跡―第52次発掘調査概報―」岩手県文化財調査報告書第111集
- 岩手県教育委員会 2002 「柳之御所遺跡―第55次発掘調査概報―」岩手県文化財調査報告書第113集
- 岩手県教育委員会 2003 「柳之御所遺跡―第56次発掘調査概報―」岩手県文化財調査報告書第115集
- 岩手県教育委員会 2004 「柳之御所遺跡―第57次発掘調査概報―」岩手県文化財調査報告書第118集
- 岩手県教育委員会 2004 「史跡柳之御所遺跡整備実施計画」(部内資料)
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 「柳之御所跡 一関遊水地事業・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査報告」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集
- 佐藤嘉広 2005 柳之御所遺跡出土かわらけの年代推定～ロクロかわらけ大皿を中心に～ (投稿中)
- 東北大学東北文化研究会編 1959 「奥州藤原史料」
- 平泉町教育委員会 1994 「柳之御所跡発掘調査報告書―平泉バイパス・一関遊水地関連遺跡発掘調査―」岩手県平泉町文化財調査報告第38集

平泉文化研究年報 第5号

平成17年3月31日発行

発行 岩手県教育委員会

岩手県盛岡市内丸10-1

編集 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課

印刷 川嶋印刷株式会社

岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21



平泉の文化遺産
HIRAIZUMI